

特206
569



0044957-000

特206-569

郷土の菜

池田尋常高等小学校地理研究会

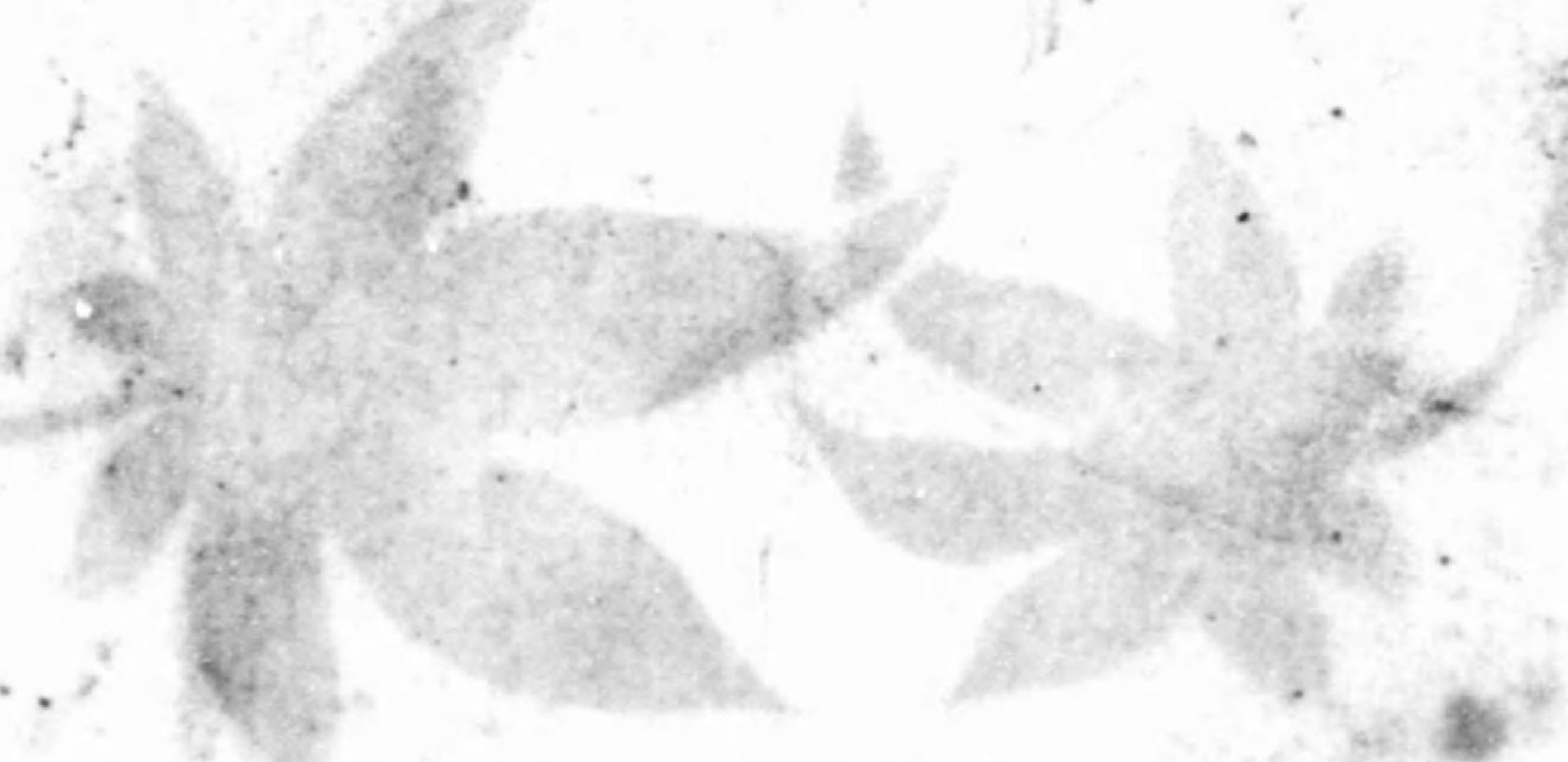
昭和3

AHF

特206

569

御土の葉



持206
569



溪豪……………誇の土郷

緒言

兒童が地理學習に於て地理的現象及人類の生活現象を了解するには、郷土に於ける基礎的觀念に照合して了解することが最も大切である。

その基礎的觀念は、吾々が日常生活する郷土の自然界及人類界を觀察することによつて得られるものであつて、彼等が他日地理書を學ぶ時、所謂郷土の材料が活用せられるところに眞の學習が生れるもので、延いては郷土の地理的意義を徹底的に知らせることが出来る。

然るに、これまで兒童に對して、郷土を知らさせる適當なる調査事項なく讀物なく、地理教授上遺憾の点が尠くなかつた。

本書は本校兒童に讀ませることを目的として、郷土を地理的に歴史的に考察して、郷土教授用として編纂したものである。時に正鵠を失するの記事がないとも限らないが、努めて誤りなきやうした積りである。

「知るは愛するの始。」とやら、本書は常に地理學習の基礎觀念を養ふのみならず、これを讀むことによつて、學ぶことによつて、愛郷心の涵養に資したい重大なる任務を持つてゐるものである。

尙本書は、常に兒童の地理學習書たるのみならず、郷土民の等しく愛讀して郷土の理解につむべき良書である。

幸に本校に學ぶ兒童並に郷土民が、本書によつて一つは地理學習の基礎をつくり、一つは愛郷の念を養ひ得て、本書編纂の趣旨に添ふなれば、余の本望とするところである。

終に直接本書編纂の任に當られた本校古川・平井の両訓導の獻身的努力の勞を謝すと共に、これが研究に參考した參考書著者並に村内古老に深く感謝の意を表す次第である。

郷土の榮成るの日

校長 白 神 信 太 郎



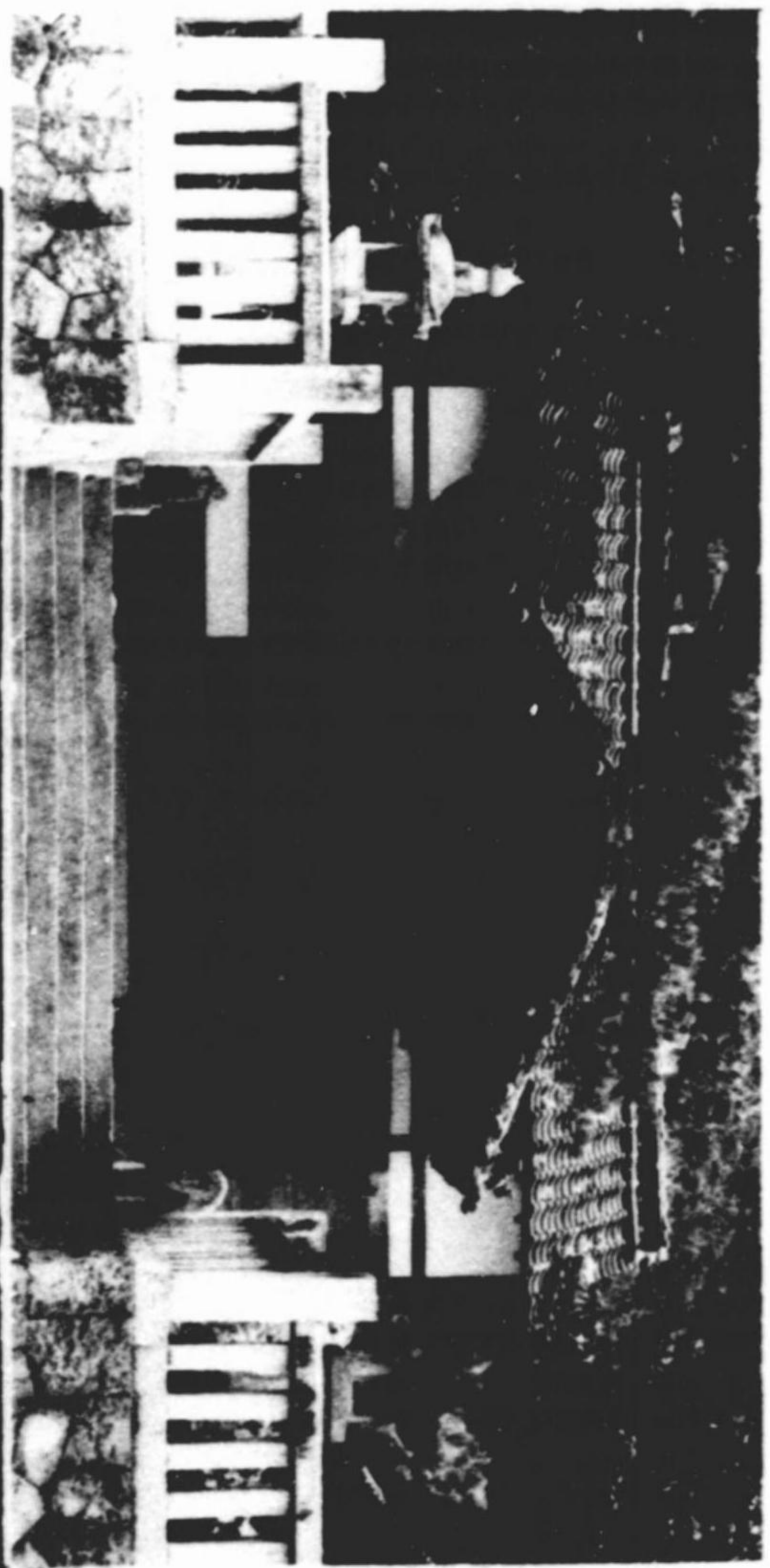
寺 滿 正 と 落 部 粟 六

落部延見



溪家と落部旗下





上 横部 池 田 神社

のぞみ

皆さんが、この郷土の葉を読むについては、次のやうな考を心にもつて読んでいただきたいのであります。

「郷土の葉」は一體どんなことが書いてあるのでせう。

皆さん、皆さんが着てゐる着物や、毎日食へるお米や其他、又學校で使ふ筆・墨・針などは、皆どこから出来何からくるのですか、眼をつむいで地をいつてごらんさい、もしも地がなかつたならば——考へてごらんさい。皆さんのお家の家はさうです、さうして山の麓にあるのです。家から學校へ來たり歸つたりする道はさうです。人間が地と仲よくしたり、地を上手に使つたり、地が人間のじやまをしたりなど、地と人間の仲は中々こみいつてゐます。兵庫のトンネルはさうでせう、豪溪はどうでせう。

此の様に人間と地、地理であります。

この「郷土の葉」は、いはゞ郷土の地理讀本でもいふべきものであります。

郷土とは、皆さんが生れたところを真中にして、其の邊の皆さんが見るここの出来る區域であつて、この本の



區域は池田校を真中にして見るこゝの出来る區域であります。皆さんは、此の區域で地理を早く知つて、これを早く使ふやうにしなければなりません。

皆さんは、郷土に生れて郷土で大きくなり郷土に大恩をうけてゐます。そのに郷土にゐる郷土の有難さを知らぬことは、恰度空気のありがたいこと、太陽の有難いことを知らずに居るのと同じことである。皆さんが大きくなつてはじめて他所に行つてごらんさない、どんなに郷土のことが次から次へ浮んで來ることです。私どもは郷土を知らねばなりません。

けれども郷土の地理を習つただけではいけません。「井の底の蛙大海を知らず。」になつてしまつては、かへつて郷土地理をそこねます。大いに郷土地理を基として新しいことは加へ、又他と比べることによつて眞に郷土の理解に努め、更に大きい郷土を知ることに努めなければなりません。

三

郷土は世界の縮圖ではありません。

讀本巻四第十四課に次のやうなお話の文があります。

「東京の宿屋で、山國のものと、島國のものがおちあひました。山國のものが

「日は山から出て、山へはいる。」

といへば、島國のものが

「いや、海から出て、海へはいる。」

こいつてあらそひます。そこへ宿屋のていしゆが來て

「へええ、日は屋根から出て、屋根へはいるものではございせんか。」

と。

これは、何を物語るものでせう。

郷土は他の大きい郷土を知る尺度であるこゝを知つてこれによつてはからなくてはなりません。

四

ほんまに郷土を知つたならば、旅行した時でも、外國の地理を習ふ時でも、よく比べて見なくてはなりません。産業の上から一例をあけるなれば、自分の村に農業をしてゐるからよそも農業でなくてはならぬと考へてはなりません。何故自分の村に農業がよいか、何故商業が適しないかを調べるのが郷土地理の仕事であります。

五

郷土地理を習つたといつて、愛郷心を切實してはなりません。

「日本人は日本村をつくらなくてはならぬ。」と考へるこゝこそ愛郷心と思へませうが、まだ眞の愛郷心といふこゝは出來ないのであります。

人間はどこへ行つても住める。住む所が己の郷土と観する、英國人の様な大きい度量がなくてはなりません。「世界を郷土とせよ。」まことにその通りであります。

郷土の葉目次

村の姿

池田村の展望	郷土寫眞	下横部落の景観	上横部落の景観	豪漢説明	池田村の氣候	兒童の觀たる村の姿	僕等の住む下横	雨の日の中村	私等の部落	我が村	地名による村の姿	村のおこり	三ツ木	八重栗 西の地	昔	湯頭山薬師堂	鵜飼石	むかしのならばし	横谷焼	地主人	家による村の姿
【一】	【二】	【三】	【四】	【五】	【六】	【七】	【八】	【九】	【一〇】	【一一】	【一二】	【一三】	【一四】	【一五】	【一六】	【一七】	【一八】	【一九】	【二〇】	【二一】	【二二】

人生と衣食住	土地と家	文化と家	郷土	郷土の考察	銅が出た郷土	水晶山の水晶	衛生によき郷土	耳目はひらく	共同の營み	池田村の副業	山林と人生	池田村の歌
【五三】	【五四】	【五五】	【五六】	【五七】	【五八】	【五九】	【六〇】	【六一】	【六二】	【六三】	【六四】	【六五】

大きい郷土

はじめに	移民	移民の起るもと
【一〇三】	【一〇四】	【一〇五】
移民の旅費	移民と本國	移民と國土
【一〇六】	【一〇七】	【一〇八】
移民の歴史	日本人の移住してゐる處	米國の排日問題
【一〇九】	【一一〇】	【一一一】
有望なる南米	アルゼンチン	終
【一一二】	【一一三】	【一一四】

村の姿

池田村の展望

景観

山に上つて「あゝきれいだ。」とか又は「萬歳」みたいなことばがひそりて出るときは、皆さんもあちはつたことがあるでせう。

廣く一目に見えた満足の心もありませうが、ほんごに目にうつる景色が美しいからでもありません。

山に上つて下を見たとき、ぼつと展げて見える自分の村がいつになくちがつたやうに見える時、山に上つて自分の家をさがすとき、日にあつて光る屋根瓦も、夕食の煙にかすむ自分の部落が靜にくく黒いくく暮に抱かれるのを見たときは言ひ知れぬなつかしさを感じるでせう。

自然のままも美しいけれども、山と流れに沿うて家のあるところは一層美しいものです。山に上つて家を見たとき一層その景色は増されるものであります。

郷土寫眞

大体池田村の展望は郷土寫眞によつて味ふことが出来ます。初にのせてある郷土寫眞は各部落各部落の特徴をといふ考へでしたが、二個部落もうつつたり、特徴でないところもありませうけれども、池田村といふ郷土の特徴にはいづれもなると思ひます。

穴栗部落の景觀

之はなるべく多くさるといふ考へで秦村の公園の絶壁の後ろからとつたもので、絶壁がかすかに見えてゐます。穴栗といふ豪溪の入口から豪溪氣分が現れてゐると思ひます。

高梁川に沿ふた總社方面から高梁・新見方面に向ふ縣道の兩側に家が沿うて集つてゐるのが見える。水と家との所でくわしく説明してありますが、此の部落にもやはり上から下の集り方もあるし、下から上の集り方もあります。

汽車の姿の見えない驛がらんごして見えます。此の寫眞をとつて十五分程して汽車が着いたのです。

停車場が出来てバラック式の驛前の待合所も見えます。家を主になつたものだから、今では伯備線が一番長い穴栗のトンネルが這入らなかつたのは残念です。穴栗のトンネルのある山からうつしたならば、もし此の部落が道路に沿うた部落といふことが分つたかも知れません。割に小さい版で正満寺をうつしてゐませう。穴栗で

はない池田村の唯一の寺で、寺らしい一種のゆかしさをもつてゐます。うつすきき清められた庭や墓地を見てなんとも言へぬ感じにうたれました。

見延部落の景觀

是は此の部落が幾つにも分れて、部落が一度にどれぬ關係上、先づ中心地である學校・役場附近をこつたもので、ちやうど酒屋の上の山から展望した寫眞であります。

ここにもやはり向ひの山が絶壁をなして豪溪氣分を現してゐると思ひます。

夏のことにて水のひた横谷川が自分の体を裸のまま現してゐます。

道は吉川村に通ずる道路で縣道であります。道路の左側に黒く溝のやうに出てるのは横谷川に水の少いことを物語るもので、田水用の溝であります。溝の附近から礫の所々に草原が見えるでせう。若いこの草たちは農家の大切なもので、牛の放飼に此所を使ふのです。

すつと左手の大きな屋根は酒屋の二棟で煙突の色や屋根の色を見て下さい。冬の煙が思ひ浮ぶでせう。

全体に屋根が層をなしてゐるでせう。之は地の形の上から人が自然の儘の形に従ふたわけです。

小形の分は本村から中島へかけての景觀です。

本村が北半分しか寫りませんでした。

下手の橋ですが、恰度これは扇の要のやうです。形の上から言ふても、この橋が基になつて、部落は廣がつてゐますし、又實際、本村の大事な聯絡路になつてゐます。後に山があり、部落の前をば横谷川が流れ、川には橋が二つも架り、川に沿ふて道は南北に通じてゐる。遙に中島部落を望むといふ、この寫眞は立派な風景であります。

下榎部落の景觀

之はお宮から見下ろした寫眞であることが分るでせう。見延部落の寫眞で遠くうすくうつた、八重栗附近が此所でもやはり遠くうすくうつてゐます。市場附近はお宮が絶壁の上にある關係から、大体よくとれました。市場に沿ふた細い舊道路と新道が稍太く松の真下に見えるでせう。大体昔から家を見ると、普通、山を背にし、川を前にして建てる家の建方であることが分ります。

こゝでもやはり横谷川が前方に見えるでせう。此の市場をすつと奥深く、道しるべより左に折れると、豪溪に行くわけです。繪葉書を見ても、遊覽者を見ても多くの人が見返橋から見た風致を稱します。この外豪溪のながめ方は色々あります。皆さんの中にはまだ豪溪の頂上から景色を觀た人は少いでせう。

此の豪溪の寫眞はさういふ点から頂上からとつたものです。天柱山が化物のやうにぬつと聳え。清い横谷川がその麓を洗つてゐます。何も言へない只無言のうちに自然の努力の偉大さに打たれるのみです。

上榎部落の景觀

之はお宮の東の山から、すつと上榎を見渡した寫眞で、横谷川の支流である上榎川が平素水の少いのを現しながら、部落に沿ひ又部落に沿ひながら大和境に行くもので、池田村としては豪溪附近と此の邊が最も疊がよくさぶ所です。

川の中に松の木がまばらにあるでせう。川に沿うて新道路が出来ました。家は舊道路に従ふもので、多くは此の見える限りが、此の部落になくはならぬ田であつて、村の生活は此の田によつて始るのであります。日本の土地が人口に比して少いといふことは、谷から谷、山から山へこのびきられて行く田畑が切實に此の部落にも現れたのか、川の一部分は最早や田に化せられてゐます。人が自然を残る限なく利用してゐるものであります。

お宮は村の鎮守として、矢張り其の村の有様を物語るものであります。お宮が古ければ、その村のゆかしさかしのばれ、新しきお宮は莊重の感を起さしめ、何れにしてもお宮はお宮として日本の特長を示し、又村の特長なるのであります。

郷土の形

地勢

池田村役場の現勢調査簿（初めて發した大正元年よりそれより以前は、大体此の調査簿によつて考へることが出来る。）の土地欄第一頁に池田村の地勢を左の様に書いてある。

「池田村は南北長く、東西狭く、北は大和村に、東は福谷村大字西山内、大井村大字粟井、阿曾村大字奥坂・黒尾に接し、西は日美村大字日羽に接し、南は高梁川を隔て、秦村に望み、又一方總社町大字井尻野に接せり。横谷川は大和村より來り、南に村の中央を縦斷して高梁川に注けり。大和村に通ずる縣道は横谷川に沿ひて南北に通じ、鳥取縣に通ずる縣道は、大字粟井を東西に横斷せり。山岳多く、耕地は僅に横谷川の兩岸及び、高梁川の左岸にあり。人家其の間に散在して、幾多の部落をなせり。」

成因と特徴

之をも少し調べて見ますと、皆さんが平素學校で郷土地圖を見たり、皆さん自身が實際行つて見た通りで、池田村といへばすぐに「横谷か」と言はれる位、皆さんのすむ池田村は横谷の井風呂谷か、高梁川の流りに沿つて

ある谷か、どれにしてもやはり谷にすんでゐるものであります。他所へ行くにも、總社へ出でんと思へば、權現岳か、東塔坂峠か西塔坂峠かで、大和村に出でんとしてもやはり横谷を通らねばならず、大井村に出でんとしてもやはり畑ヶ野川の谷を通らねばならない。

谷は谷であるが、皆さんが人として利用すべき谷である。

中國山脈は古代の山脈で、遠く四國山脈にも及んだものである。中國山脈と四國山脈については五年生で習ふが、さにかく今の瀬戸内海といふものはなかつたもので、今の四國まではすつと陸つゞきであつて、それが後になつて、大和國・難波國から瀬戸内海に及ぶ一帯が陥没して海になつたもので、現在の國道などは昔は海岸を走つてゐたものである。その頃の高梁川は今の湛井から總社町へ向けて流れてゐたもので、現に總社町の地下に礫石のあるのもそれが爲で、倉敷なごはその川の變化につれて生じたもので、倉敷が天領にして、高梁川即ち備前備前の物産の需要供給の政治的位置をなして誇つたのも、それから後のことである。湛井は水を湛へてゐることとで湛井の起因でもあり、又湛井の起つた理もここにあり得るのであります。粟井は後に地名と土地について申しますが、シサワはサワ（澤）で水のはこりを表すものであります。

ちつと地圖をご覧なさい。馬越のお宮の山が饅頭形になつて、その山の水は四方に流れて、一が上横川に直ちにはいり、龍頭ヶ瀧から流れる水もやはり上横川にはいつてゐます。

上横川と畑ヶ野川の分水界が地圖の三六四・七米で、一は上横へ、一は畑ヶ野川へはいつてゐます。畑ヶ野川

と井風呂谷の小流の分水界は地圖の四〇三米で、横谷川は遠く大和村より豪溪に入り、天柱の分水を受けて宮田に於いて、支流である上横川と合流し、走つて西之地に於て畑ヶ野の分水を合せ、明治橋の下において高梁川にはいつてゐます。

高梁川は岡山縣三大河川の一つで、阿哲郡から出て現在一部は玉島方面に流れ出、大部分は溝井から田水として引用されるのであります。

山は一般にけはしくてしかも急である。土地に於いても溝井を境にして、一は陥没地帯であるために、高さに於いて總社驛（東總社）附近の十四米に比べ、溝井に於いては二十九米三〇となり、宍粟の道路（秦渡の分岐点）においては二十八米二一となり、五軒屋の附近が二十七米九五、日羽に至つて三十三米三七といふ様に、溝井を中心にして、南總社方面より北宍粟・日美村とは、高度に於いて十米の差を見るのであります。明治橋から大和村又上横方面へは、自轉車に乗つても、水の流の早さを見ても、その高度が大体分るでせう。

山が急でしかもけはしい爲に、流水に於いても高梁川と横谷川とはちがふのであります。いつてもよろしい、一雨降つた時に明治橋に立つて比べて御覽なさい。平素水の少い横谷川が、濁流滔々岩石を飛ばし、小砂利を流して、高梁川の悠々たる流れより二尺の上に水面があることを。しかしながら時間の經つに従つて、地質の違ひ、山の關係、大小の關係から、その有様が逆になることをもついでに御覽なさい。

池田村の地質は花崗岩がまるで露出してゐるのであります。花崗岩の特徴として、雨水に機械的にくたかれ、

結晶質のまま、壤質にならず、崖となり、錐となり、懸崖となります。豪溪などはその標式であります。次に豪溪の表文をのせてをきます。

豪溪

説明

花崗岩ヨリ成レル横谷川ノ峽谷ニシテ、兩岸ハ絶壁又ハ石柱ヲ成ス、天柱峯・圭嶂・盒子岩・劍峯・雲梯峯等ハ其ノ著シキモノナリ。殊ニ盒子岩ハ東西ニ長ク、南北ニ短キ長方形ヲ呈シテ屹立シ、水平ノ節理發達セルヲ以テ、恰モ箱ヲ重ネタル觀ヲ呈シ、亦重箱岩ノ稱アリ、雲梯峯ハ屏風ノ如ク屹立スルモ一方ハ梯形ヲ成ス。其ノ溪谷ハ少ニシテ、河床ニハ特ニ舉グベキモノ無キモ、三鈿潭ノ如キ水平ノ岩盤上ニ水流ノ激スル處、亦西峯ノ峻峯ト相俟テ捨ツベカラザル風致アリ。峽谷ノ規模雄大ナラズト雖、花崗岩ノ垂直及ビ水平節理能ク發達シ之ニ沿ヒ、風化侵蝕セラレテ削崖奇石ヲナセルモノ、一標式タルノミナラズ、小地域内ニ於テ變化多ク、蓋シ中國地方ニハ稀ニ見ル名勝地タリ。

主なる山と川

流域

各川に沿うて多少の線状平野があります。線状平野とは各河川に沿うてある平野で、川は土砂を運ぶことが一つの働きで、先づ土砂を山からけづり出し、それを流れに沿うて運んでまわります。流れが急であれば、その運ぶ力や、けづる力は大きいが、流れが緩くなりますと、その運ぶ力は小さくなります。流れて運んでる途中、川が折れるといへばをかしいですが、曲つてゐる所へ来るに、その運んで来た土砂をそこに積んで、水だけ流れて行きます。又その土砂がだん／＼大きく大きくなりますと、まつすぐになつて流れて行くので、次第に川は細く浅くなるはずですが、時々大洪水を出して、今まで積んでゐた土砂を一度にさらつて持つて歸ります。道路に砂がなくなつて大きな三角岩があるのはそれが爲です。

かやうに川は削つて、運んで、溜める、といふしかたで、次第に積をつくつてまわりますして、それを人が利用するといふことになつてゐます。かうして出来た平野を線状平野と申します。之から皆さんと地圖によつて調べて行きます。

先づ日美村から高梁川に沿うて下りますと、作原の所で高梁川が曲つた爲に南折し、その所に草田といふ所が出

来てゐます。草田で再び曲つた爲に、日羽の平野が開け、それが又も五軒屋で曲つたために、穴栗がその高梁川の東に出来て居ります。現勢調査簿に高梁川の左岸にあるのは、南向に見たもので、今の様なわけで出来たのであります。したがつて横谷川の兩岸と言ふのは、郷の内にしろ、市場にしろ、又中村附近にしても、線状平野で只此の平野にはけづることが今よりはけしかつたのであります。これ各部落の土地の出来た原因もほづわかつたでせう。

名まへに高さ(長さは大約です)

- | 山 | 高さ |
|--------|--------|
| 1、城山 | 三六〇米 |
| 2、高尾山 | 二八二・四米 |
| 3、天柱山 | 三二六米 |
| 4、金山 | |
| 5、ぶんき山 | |

川

- 1、高梁川(二十五里「穴栗の所を」西北より東南)

(地形圖参照)

- 2、横谷川(四里) 北より南
 - 3、上横川(一里) 北東より南西
 - 4、畑ヶ野川(一里) 上横川に平行
- (雙子川)

(地形圖参照)

氣候

氣候と人

人類が地球上に棲息する以上氣候の支配を受けずには居らない。

さうしてこの位その影響の大なるものもありません。

第一、人体に影響を及ぼします。(人間に衣食住参照)我が國はさうして我が池田村は人間生活に適する温帯の中です。棲息と言ふことに支障を來たさない分も、印度とか南洋とかのやうに暑くて御覽なさい。勉強するのも大儀だらうと思ひます。仕事をするのも、せいぜい出来る丈けのこころをしてすまさうと、こんな氣になるに違ありません。早い話をすれば、皆さん方が夏の午後、教室でコクリ／＼とやるのと同じわけなのです。さればこ

んなだらしのない退嬰的なところには、文明國はない。寒い西比利アの曠野にも同様であります。

これは人の精神に及ぼす影響から見たのですが、人の生を營んで行く上にも、この氣候は決定的なかはりをもつてゐるのです。それは、

第二、氣候の産業上に及ぼす影響であります。

米をたべて生きて行かうと思つたところで、西比利アやフィンランドのはてではさうすることも出来ません。つまり農業が出来るのはその地の氣候が農業に適するからです。佛蘭西が葡萄酒で世界に鳴してゐるのも、その地が温暖で葡萄の栽培に適し、澤山葡萄の實が生るからであります。こんな例は澤山あるだらうと思ひます。皆さんで考へて下さい。

池田村の氣候

さて以上のやうなこころを考へて、池田村の氣候を思ふとき、誠に幸なるかなと天の恩恵に感謝せずには居られません。

本村の氣候は温和と言ふべきです。夏・冬共に格別厳しいといふこころもありません。ただ小さい氣候の變化について言ひますれば、幾分、夜、氣温の下がるこころが著しいこころはないかと思ひます(これは地勢上より)。一つは実粟は稍氣温が低い。(川の影響、川風の吹く爲に冬は特に著しい)横谷の奥

も、稍々冬期が寒い。(地勢上)

しかしこれとて、隣村大和に比べると良いのであります。

大和では、秋蠶を飼つてゐるとき、俄かの寒冷の爲め、霜が来、それが爲に桑が枯れしなびて、大損害を受ける
ここが有ります、けれども、池田村ではそんなことはない。砂防地の松の苗木が枯れることもない。以上で大概
推察がつきます。

雨量は充分。温度は谷川のあるこゝによつて餘程調節されます。秋雑木の美しく紅葉するのを以ても分ります

(紅葉は糖分と湿気による)

風は概ね、季節風ですが、山間なので、時に山風、谷風が吹きます。

晴天の日が多いこゝは種々の点で便利がよい。わけて名勝地豪溪を有する本村にまつては、行樂にもつて來い
であります。

兒童の觀たる村の姿

僕等の住む下槇

小倉 實夫

南には見延、東北には上槇、其の間にある西之地。
八重栗・山之下・市場・向郷之瀬・郷の内・及び畑ヶ
野を合せて下槇と呼ぶ。山が多くて、北から南に流れ
てゐる横谷川に沿うて少しばかりの田畑がある。田に
は米・麥、畑には薄荷・麥・大根・桑等を産し、養蠶
業は次第に發達してゐる。村の大部分を占める山には
良材が少くて、松・檜・樺・槲・其の他の雑木がある
春は山々緑に萌えて、もみぢ・櫻・がにつこり笑ふ
秋は雑木が紅葉し、四方の山が眞紅に燃える。小鳥は
嬉しきうにさゝづりながら木から木へ、枝から枝へミ

飛んでゐる。

名勝として天下に名高い豪溪は此の下槇にあつて、
重なる岩に咲いた花、雑木の紅葉が横谷川にうつして
其の景色は筆舌に盡しがたい。

かくの如き美しい所で、平和を樂しみ、仲好く暮し
てゐる五百の村民はまこゝに幸福であるといはなけれ
ばならない。

雨の日の中村

中田 要

窓からのぞいて見るミ雨がざんく降つてゐる。向
は霧がかまつてゐる。幾筋もの電線には澤山の燕がな
らんで、何かしきりに話し合つてゐる。
山際を流れてゐる横谷川は今日に限つて、水が多く濁

水がごう／＼と音高く流れてゐる。
新道の兩側の廣い田圃は、何處もよく出来てゐる。稻を大事に思ふみんなが、雨がふればよいがと待ち望んでゐた所へ雨が降つたので、大喜びで、田圃の水を見廻はる人々もにこ／＼してゐる。

「今年はまだよい年だなあ、田植頃には大雨が降り、水がないと心配してゐるころへ今日の雨、何とこよい都合ではないか。二百十日が何事もなければよいが。」と歌をかついだ人々の間からこんな話聲が聞えてくる。

彼方では桑畑に大きなふぶをかつきこみ、忙しげに桑つむ人々、空を見上げては「あゝこまるなあ」三天氣をひどく心配して居られる。
向ふの田圃の中間を南から北へ真直につきぬいてゐる新道は、やつと去年出来上つたばかりなのに、もう此

の頃は貨物自動車も通るやうになり、自轉車・荷馬車等の往來が頻繁である。
淋しかつた中村の原も、今は町のやうな感じがする。

私等の部落

横田 豊子

今朝起きて向ふを見ると、山が霧に包まれてほんやりしてゐます。時々鳥の聲が聞えるだけ。淋しい所です。
山端は大和の村境です。部落の東の方を、細い谷川が二筋さら／＼と流れてゐます。源は吉川のすうつこ奥の方です。

四方が山で少しばかり田圃がひらけてゐます。ですから産業上にもこれといつて、取り立てゝいふ程のもの

はありません。

たゞ米はこの綺麗な水と、花崗岩を含んだ土によつて、良質のものが取れます。それも極く僅かです。

こんなわけで仕事の合間にも遊んでゐられませんが、戸毎に蠶をかつてゐます。
將來、此の部落は發達するでせうか、しないでせうか。

我が見延部落

平田 愛子

此の見延はほんどによい所です。
四方は山で圍まれ、春は花、夏は青葉、秋は紅葉、冬の雪、これらは皆天から授けられた自然の美しさで、都會では見られないものです。
村は大体盆地の如く、その中央を清い横谷川が流れ、

金鈴のやうな河鹿の聲は夏の暑さを忘れさせます。氣候も横谷の奥の方よりはよく、その上學校も役場もあつて、村の中心になつてゐます。
酒・酢・醬油の醸造も仲々盛で、酒倉の大きいものが立つてゐます。酒造は冬の間で、もう酒を造らうと言ふときには樽洗ひがあります。何石入といふ大きな樽が何十となくなればられます。愈々始つて、毎日々々汽笛が鳴出すと、急に賑かになつて、村が生き／＼して來ます。

農業も他の部落に負けないと思つてゐます。
こんなよい所に生れた私等はほんどに幸福な事だと思ひます。
たゞ少し残念なことは、交通が不便なのです。それでも近頃は自動車が往來し出したので前ほきにはありません。

「住めば都よ、我が里よ」
なんといつても、私は此の見延が一番よいと思ひます。

我が部落

守谷 豊子

我が部落は戸數百戸、人口凡そ五百の小部落である山上より見るに、一筋の縣道に沿うた街村であるといふことが分る。
最近伯備南線が開通したため、交通が便利になつた。それがため局が出来、電信・電話が通じ、昔の宍粟ではなくなつた。
後は山を背にし、前には高梁川を控へてゐる。
高梁川は誰知らぬ者もない、岡山縣の三大河川の一つ

である。昔は此の川も随分役に立つたもので、荷物を満載した高瀬舟は、高梁から玉島の方までも上下したものだ。今は陸上の交通がよくなつたので、昔程は利用せられてゐないが、それでも朝夕高瀬舟を見ないことはない。
この川があるために、宍粟のへんが、大へん景色がよい。福谷の渡しから川は大きくうねりながら、宍粟の前をズウーと流れてゐる。つい前の向ふ岸には、石村公園の岩山が川にさしかかり、枝ぶりのよい松が影をうつしてゐる。その下には土手がおこり、遙かに、下秦の夕霧の中に消えてゐる。
夏の夜は、鮎取りの火が水面に美しく、湛井のへんからは涼船でひく三味の音も聞えてほんまによい。
交通の便利な我が宍粟は、池田村の先頭になつて、發展して行くに違ない。

我が村

水船 静

我が村の人口は僅に二千餘である。随つて田も、横谷川の狭い流域に少ししかない。
池田村には有名な豪溪があり、一時は日本新八景の中に入れようと思つたものだ。
学校や役場を中心に、上を上横・下横に分け、下を宍粟・見延に分けてある。
下横には池田神社が山の上にある。
見延の中の保木には酒屋・醤油屋・酢屋等があつて、そこらまはりには大きな家がすうり立ちならんでゐるその上に最近道路を廣くしたので一寸見るに町の様である。
宍粟には伯備線が通り、宍粟驛がある。

豪溪の紅葉が美しくなるに、よそから人が澤山来て、驛のまはりも仲々賑かだ。驛の附近には運送店・郵便局・店屋があつて、本村第一の繁華な所である。
一体に池田村は四方が山で、そのふもみに家が少しづつかたまつてゐる。
山間の土地にはまた都會なごで味はれない所がある。
秋の山狩——茸狩なきが其である。

我が村

在間 文定

豪溪の岩根を洗ひ、流れて高梁川に注ぐ横谷川がある。その谷間にある細長い村こそ、我が池田村である。
横谷川は、我が村にまつては風致上から言つても、農業上から言つても大へん大事なものである。

この川の流域に存在する戸数は約四百、多くは農家で
ある。

村の中央には學校・役場などがある。

豪溪は我が村の誇である。近年自動車を通ずるやうに
なつてからは、見物に来る人も多くなつて。我が村も
幾分か豊になつた。

しかしまだ、村民が都會へくみ出て行く風があつて
村も衰へはしまいかと心配である。

豪溪を有する池田村である。何にしても村の名を落
してはならぬ。産業の開發、民心の作興に村人は力を
合はせなければならぬ。

地名による村の姿

村のおこり

現在の村のやうすはもう餘程よく分つたことだと思ひますが、今日の如くにまでなつて来た、その過程はさう
であつたらう。

一体この村の起りはさうだらう、と村の生立の次第を考へて見ることも面白いことだと思ひます。この成長の
跡は伸びるべき方向を進んで来たものであり、將來の村の進路をも暗示してゐるやうにも思へて、これが考察は
極めて意義のあることだと思ひます。

すつと大昔のことは分りませんが、とにかく、村としての形式が固まるころ頃からは、大体見當がつくので
あります。

本村の三部落（穴栗・見延・横谷）は何れも日羽郷の中にありました。

穴栗

先づ穴栗から初めませう。

穴栗村の起りですが、これは日羽から惣領宮を當地へ迎へ、その宮田にして、この附近に一段六畝十六歩の田を

三ヶ所置きました。この田で稻を作るお百姓が出来ました。これがこの村のそもくのはじまりです。それなら穴栗と言ふ名はさこから出たか言ひますと、恰度只今の赤木の古城址と言はれる山の上に、公家さんが住んで居られました。いつ頃から住まれたのか、よほご前より住んで居られたものゝやうに思はれます。栗地の里と言つてゐました。穴栗といふ名は、つまりこの栗地の里から出たものゝやうに思はれます。何にしても古い所で、正倉院文書に「天平二年賀陽郡日羽郷穴栗里狹野里（狹野里は今詳でない）」とある

ことによつても知られます。

「参考」 穴栗は日本全国にもう一ヶ所あります。それは播州の穴栗郡（シサウゴウリミ詛りてもよむ）であります。此の地の名の起りは、大鹿に出遇つたからその里を穴禾（アハは會ふの）アハ村と號したことによる）（風土記）、さても穴栗は鹿猪の多き山なれば此名ありと曰ふ（播磨事始）故にこの備中穴栗も古、狩獵の地にあらざりしかと想像されます。此は参考までに。」

さてかの栗地の里の後を受けて城としたものが、赤木但馬守です。この城は精の城といひ、又備陽國誌には米の城山と書いてあります。

この名の起つたについてはいはれがあるさうです。木曾義仲が、この城を落さんもの攻めよせましたが、仲々困難である。水攻にしたなら落ちるであらうと、その計を廻らしたが、高梁川の堤を破つて水を引くことが出来ぬ。そこで白米（つまりしらけ）で馬を洗ひ、水を見せて城兵を欺いたのです。かくて城は落ちました。この

ことによるのださうです。

木曾義仲が攻めたと言ふことについては、木曾橋なごの名が今日残つてゐることによつて明かです。かくて城主は落ちのびくして、その弟の人が遂に又この穴栗の地に止りました。（平田静氏の祖）

現在の谷尻のへんの田圃は川田といひ、ごく最近の田と言ひます。つまり川であつたのを、平田氏の祖父の代、田にしたのださうで、川は従つて東の方へよつたのです。（勿論、今の縣道はなかつたもので、村の道は、下組から山根を通する道だつたのです。）

眞觀寺の地名あるは、この地にこの寺があつたからで、寺號のみが残つてゐるのであります。（眞觀寺は赤木家の菩提寺）

穴栗で百姓をしてゐた人達は川に溯つて開いて行きました。

籾田

籾田の地名は、籾を開いて田としたことに起つてゐるのです。さうしてこの籾田は見延へこ進む元の地であつたのです。

ですから見延は穴栗の枝村であることを知つて置かねばなりません。

今籾田の東方、小松の生えたなる地は、横谷川が土砂を押し流したために出来たのであります。ですからあそ

こは地が全然砂です。(是は最近のこと)

三ツ木

三ツ木の地名は、ちやうど、井風呂が道を横ぎつてゐる所から上の方に、三本の木——松・楓・櫻——がある
そのことからつけられたものです。
出むかひじんべんと言ふ所も、本行坂太郎さん方の北上だつたらしく、天柱山へ向ふ行者をあそこらで出迎へ
て居つたのでせう。

この舊道路には、石佛を祭つた箇所があります。昔の様も偲べれます。

本村 中島

次に本村ですが、前に言つたやうに飯田が根源をなすので、本村としての意味は認められません。之は別な意
味で、村の中心になつてつたものでせう。

中島は、中の島、又中の洲の意味で、今でこそ家が川の西、山に沿うてありますが、或時代には中の島にあつ
たのでせう。

船場山は東山と西山に分れて、共に備前領として見延。横谷を取圍んで居りました。

保木

保木はどうでせう。ほきこいふこまばは岸險、即ち山岸の谷へさしかゝれる險しき所をいふのです。して見れば、
之が地勢から来た名まへであることが分ります。

今の巡査駐在所、酒屋なぎのへんには家はなかつたもので、その上の高い所から、今の學校のへんにかけて家
があつたのです。それが大水なきて、崩潰したために、下に降り、その後は大水も出なくなり、道べりで交通の
便利もよいので、そこへ落ちつくこととなり、現在に及んでゐるのであります。

八重栗 西の地

横谷は穴栗村とは別で、横谷村といふ一つの村です。

八重栗はさういふ一種の栗があつたのでせうか、又は栗が澤山あつたかです。

土井といふところがありますが、これは城の近くには必ずあるものだからで、瀧山城(鍋坂城址)のあつたこ
こにより成程と頷れます。

西の地は西の方の地でせう。

水子哲一郎氏の御宅附近は、昔井の原と稱し、煙草の産地として名がありました。

市場は市の場で、お宮のお祭りに市が立つて居つたものでせう。

宮田郷の内

宮田は、宮の田か、お宮のある田の意味でせう。

鸚鵡石は大江盛行が筆記に啼谷と見えてゐます。此の岩によつて啼谷といふを、後横谷と改めたのだらうと言はれる位、わけのあるもので、柴山前中納言持豊の歌は皆さん御承知でせう。

(横谷のおこりは啼谷より來るといふはこじつけなるべく、矢張り横多き谷より來たものを見るべきでせう。横谷といつた事もある)このあたりは、下の穴栗方面からの外に、大和・吉川の影響を受ける事が多かつたでせう。郷の内は、つまりあそこまでが、同じ日羽郷で、あそこ山から西へは違つた郷であつたらしく、それであのへんを、郷の内くみ呼んでをつたのが、地名になつたのでせう。

豪溪も郷の溪(谷)の意味です。

上横の方はさうも詳ではありません。が穴栗の庄屋の支配を受けて居つたこと、日やけなど行つたときは随分困つたことがあると故老の話です。畑ヶ野は後にひらけたものです。

最後に現在の池田村なる名は、この國を治めた領主(池田政孝岡山城主松平總州齊政の執權)何(か)がしより出(で)る(こ)を附記してをきます。

色々考へて來ましたが、つまり平凡な村で、之を取立て、言ふ程の史實は持たないのであります。

明治初年頃から、戸數が百戸餘増えた位のもので、内面的以外には別に變つたこともないのであります。

昔ばなし

湯頭山薬師堂

(一)

横谷川に沿ふて上つた道は、池田神社の下のへんで、一は豪溪へ、一は野山の妙本寺道と、二つに分れてゐる。その妙本寺道を行く右手は狭い山狭の田にして、山際になる。

そのへんから道をはさんで、ボツリ／＼家が立つてゐる。こゝらあたりを宮田といふ。夏にでもなれば、山々が青葉に包まれて、道の上になで緑の匂がこぼれて來る。

その山裾にさゝやかな御堂がある。湯頭山薬師堂である。この薬師堂について珍しくも面白い、昔話が言傳へられてゐる。

(二)

それは遠い昔のことである。この日本の土地に住む人も少く、廣い土地は大方黍や葦の生へ放第に茫茫としてゐた。その草深い野山には時としてよからぬ者もあつて、都の天子様の言はれることも仲々聞かなかつた。そこで時の天子様は御身内の中から、強く賢い御方を四人程選ばれて、地方に遣はし、治めさせられた。

その頃、宮田さいふ所に十五六の少年が五十五六にもなるお母さんと一緒にすんでゐた。子は母を、母は子を互に力にし合つて、淋しい山里ではあつたが、楽しく暮して居つた。

チヨーチヨー ハタリ チヨー ハタリ……

母の織る機のへりにはいつも少年が居て、母の話す昔がたりをなつかしく聞いてゐた。二人が向ひ合つて食べる三度の食事はとりわけて幸福さうであつた。けれどもそんな調子はいつまでも續かなかつた。

(三)

秋もたけて京山嵐の身に沁む頃、母はふさしたこまからかぜをひいた。長い間女手一人の苦勞も手傳つてか、どうつぎ重い床についてしまつた。

たつた一人頼みに思ふ母に病まれて少年はさうしてよいか途方に暮れてしまつた。

「お母さんに死なれた後の僕はさうなる。死なれてはならぬ。さうしてもよくなつて貰はなくては……」少年はもう一生懸命だつた。朝は暗い間に起きて、身を清め、南の金比羅様へお参りをした。熱にかされる母の枕下に坐つては、早く神様の御力で、この熱をひかせたいと念じた。病氣の重い時には、幾夜となく寝ずの看病をし、体をさする、頭をひやす、薄暗い灯影の下のその姿は、あはれにもいぢらしいものだつた。

それは、看病に疲れて、起きてることもなく、まどろむこともない、或る夜半のこゝである。少年は今夜に眠つて

眠氣がさしてならぬ、こんなこゝではと思ひながらも、つひうきうきしてしまつた。

フト少年の前には一人の衣冠束帯した老人が現はれた。白髭をしごきながら

「やよ、元吉よ、汝の孝心はいぢらしく思ふぞよ。ついでにはよき事を教へ授けん。

こゝより北東に當り、一町程の所に泉がある。その泉の水を母に飲まし見よ。」

その金鈴のやうなこゝばが終るか終らないかに、老人の姿はかき消す如く消え去つた。

その途端、少年元吉の目はさめた。

「これぞ神の御告」元吉は靜に立つた。病人はすやすやと眠つてゐる。

(四)

戸外は凍えつく程寒く、いつもより星が冴えて氣味が悪いやうだつた。

教へられた泉へミやつて來た。來て見るに泉の水は滾滾とふき出てゐる。元吉の顔には微笑があつた。用意の徳利にくみどつた時、泉の中に入れた手はちぎれる程だつた。

少年は大急ぎに歸つて來た。

(五)

母はまだ寝てゐる。起きるのを待つのが、待ち切れなくなつて、元吉は蒲團を軽くたゞいで、

「お母さん、お薬をおのみ下さい」

子の聲に母は目をさまし、

「何かね」

「今いゝ薬をもらつて來ましたから……ええ、神様のお薬です。さ、のんで下さい」

やせおそろへた母は徳利からうつした盃の水を、ごくりと飲んだ。ハツミした様子。だん／＼元氣がまして來る。

「もう一ぱい」元吉は母の口へもつて行くと、母はびつくりしたやうに、

「あーあ、もうよくなつた。かうしてはゐられない。ヤレ／＼」

「もうそんなによくなりましたか、それでも起きてはいけません。重い病氣でしたから……。もう少しつゞいてゐて下さい」

「いや／＼もう心配はいらない。それにしても不思議なこゝちや、一体あの薬はさうしたものですか」

母が尋ねるので、元吉は夢に神様のお告げのあつたことを詳しく話し聞かせて上げた。

「ほんとうに私達は神様に助けられたのだ、有難い、あゝ有難い」

二人は手を合せて拜んだ。

一番鶏の聲がした。夜は白々明けていつた。

一家は春が來たやうに俄に陽氣になつた。

このこゝがいつこはなしに、方々の家々、村々に傳つた。

「さ／＼の何がしさんは、この間の山崩に腰骨を折つて、難しいやうに言つてたのが、あのお水でよくなつたんぢやさうな」

「裏の七十になる爺さんはお水をつけたら腰がのつたさうな」

かう言ふ噂が立つ頃には、泉にはちやん／＼注連繩が張られた。朝晩は信神深い年寄りなどお参りする様になつた

(五)

こゝろがその時分、温羅言ふ鬼が京山に岩屋をこしらへて籠つてゐた。その兇暴なこゝろ言つたらとてものことで、このあたり一帯泣かぬものまではなかつた。けれども大力で小屋程の石は軽々さし上げて、投げつける言ふしまつなので、さうするこゝも出来なかつた。

そこでこの國を治めて居られる、吉備津彦命が、このうらを退治せられる言ふ事になつた。

(六)

命は弓矢で、うらは大岩で、平地と山に分れて戦が出來た。がうらも命様には敵はない。何べんか矢に當つ

て傷を負ふた。

「こんごこそはうらもくたばつたか。」と思つてゐられるも、しばらくするも、出て来て手向ふ。さうも不思議だしいので、家來達に色々探らせられたのに、こんなこが分つた。

それは有名な泉のこをうらも聞いて居つたらしく、傷を負ふも、京山からテク／＼下りて来て、泉の中に浸り、治しては命にお手向ひしてゐるんだと。一度なまは村の人が、うらが血塗れになつた体を泉のほとりに横へてゐたのを、見たことがある。と言ふのだ。

(七)

之をお聞きになつた命は、それは放つてをかれぬと言ふので、泉をどう／＼埋めてしまはれた。

さうして前より一層烈しくうらを攻められた。うらは今度は傷を治す方法もなくて、直きに殺されてしまつた。

尊い泉も鬼の爲に埋められた。人々は有難いお水のお蔭を受けるここの出来なくなつたのを、悲しく思つたが鬼の殺されたのをせめてもの慰みにした。

さうして、いはれある泉をば、その跡だけでも後代に傳へんものも、建て残されたのが薬師堂ださうだ。

夏草の茂るが中に立つてゐるこの御堂に、時折香花の手向かれるのは、かうした有難い言ひ傳へを信する村人の床しい心根からであらう。

豪谷老夫婦

豪溪紀勝といふ古い本があります。日曜日の午後、それを読んで居りましたら、大變面白い話がありました。そこで皆さんにお傳へいたします。

名づけて豪谷老夫婦。

昔の豪溪

豪溪は皆さんが、すい／＼程よく知つてゐる所。くどく言ふ必要もありませんが、幸古い本によつて、古の様も知つて置きたく思ひます。

備中の國賀陽郡真木谷村と言ふ所から三四丁行くも、郷谷に行ける。峨々たる高峯の谷あひで、そのはゞは廣かつたり、狭かつたりするが、その左右には三十丈あまりの巖壁がいく／＼してそば立ち、ま／＼こにならびなき鐵石城である。岩の上には眞躰うき橋などいふ所がある。

こ、こんな風に書いてあります。さうしてそこらあたりの石は悉く、詩歌が題してあつたさうで、これは方々の風流人のしたことだらうといつてゐます。所がもつ面白こは、この谷の中を深く這入るときは、歩く一方、空鐵砲を二三挺、ド、ド、ドン／＼と鳴してないに進まない。さうしてか言ふも、病氣になるから言ふのです。さうもこのへんから豪溪が薄氣味悪くなるではありませんか。

愈々話の本筋に入ります。

老夫婦出づ

天明年中のことです。この國に身分の低い役士がございました。或日鐵砲を擔いで、一人ばかり獵に出かけました。所が、さうしたところにか、徑を迷つて、この豪溪の谷深くふみこんたのであります。噂にきく氣味悪い谷ではあります。この武士中氣になつて、谷中をうろづき廻りました。

奇岩に老松はうそぶく。谷風が、魔風か、背中には冷汗で一ばい。

所へひよつこり、谷間から出て来たものがあるではありませんか。それが誠に思ひもかけぬもの。白衣白髪之年寄夫婦。武士は全くびつくりしてしまひました。二人は手をつないで仲よく、谷間の岩をピョイ〜飛びやうにこえて、こちら〜とやつてくる。

武士の眼はもうろろしてしまひました。

「こやつ、かならず、猿の年へし狒々ならん。おのれ唯一討に」三手にもつ筒を取上げて、二人の胸板をびつたりねらひました。あはや引金を引かうとした時、かの老夫婦兩手を上げて、

「壯士よ、はやまり給ふな、おのれらは妖怪けだものたぐひにはあらず。」と、どうもその聲はあたり前の人間の様です。

さうやら胸もしづまつたので、近く進みよりました。

奇怪なる老人の話。武士が

「そも、あなたは何故に、かう言ふ所にお住ひか」尋ねました所が、老人が答へて言ふのに、

「おのれらは、世の亂れたるをうれひて、かう言ふ谷間に隠れましたのでござりまする。さうも武士は合点が行きません。」

「爺さん、今あ、何ぞな、天下は泰平、四民はよろこんで居まするのに、どこが亂れて居りませう。一体お爺さんはいつ頃からこゝに住まつこられるのです。」

老人の方も甚だけけんの風。

「えと、さうもいつの頃とはつきりは申されませぬが、かうさう、おとく〜兒島高德様が、熊山に立てこもられてからでござんすわい。」

武士は大昔のことにあきれてしまひました。

「お爺さん、それちや後醍醐天皇、足利三合戦の時でござんすなあ。」と言へば、

「うんさう〜。その天子様が伯耆の船の上へおうつりのことは今になほおほえてをりまするわい。」と申します。

どうも腑におちぬことがあるので、武士が色々と問ふて見ます。近頃の様子はずつぱり分つてゐないが、たゞ後醍醐帝の頃のこゝだけはさてもくわしい。そこで、こりや偽でないか悟りました。

山中深くすみ、木の實ばかりをたべてゐるから。こりや仙人になりかけてゐるんだと思ひまして、武士は老人夫婦の顔をキョトンして見ました。

やがて老人夫婦に物凄いやうな住居に案内せられました。老人の巖頭をつたひ、かづらにぶら下つて、岩角を上り下りするところは猿の通りです。

その日の暮れ方、この武士は氣の抜けたやうな顔をして村へ歸つて來ました。

老夫婦は
一休此のへんは岡山藩の長臣、池田何がしの領地でしたからかの武士は早速このよしを告げました。

領主も甚だ奇異の思ひをなされて、次の日この武士を案内人にして、老人を見に行かれました。

老人に遇ふに、唯尼利峰起の始末なごを語つてきかせた丈で、外には何も話さなかつた。

このこゝがあつてから、この話は四方にひろまつて、老夫婦を見に行く人が増えました。さうして只では行かないで、
「爺婆さんに、あやかりたい。」と言ふので、重箱に一ぱい御馳走を入れ、瓢箪に酒をつめて、溪へ持つて行くのです。

瀧山城

こゝろが、老夫婦は何百年もの間、木の實ばかり食つて居つた所へ、人間の美味を無茶苦茶にたべたもので、たうく二十日許過ぎて、死んでしまつたと言ふこゝろです。

豪溪からの歸り道、南に當つて素張らしく恰好のいい山を見るでせう。恰度富士山のやうです。名づけて豪溪富士といひます。ほんこゝの名は瀧山。

この山についてこんな話が傳へられてゐます。
皆さんは鎮西八郎爲朝を御存じでせう。あの有名な、弓の上手です。

その爲朝が、たしか上皇様からの御よび出して、鎮西から京へ上る途中のことです。通りかゝつたのがこの池田村です。有名な豪溪を見物でもして、供の家來をつれて、テク／＼とやつて参りました。

豪溪もついそこと言ふので、腰を下ろして休みました。下は深い谷川で、すき通るやうな水が流れてゐます。いゝ所だ、見上げる秋のすみ切つた空に、クツキリと聳えてゐる山。瀧山です。

「ウーム之は立派な山だ」と流石の爲朝も感嘆の聲を放つたといひます。
やがて築かれたのが瀧山城だ、申しませう。
其の後人も變り、えらい殿様がすんでこの國を治めるやうになりました。(池田の殿様)

お城はいつ頃なくなつたのですか、現に生きてゐる人で、城に通ずる道のあつたことや、番人の居たことを知つてゐる方があります。つい十年前程前までは山のてんこらから、壁土や、厚みの五六寸もある鬼瓦が出てゐたさうです。

鸚 鵡 石

池田神社の上。土橋から右へ數百歩行くに石碑が立つてゐます。かうかいてあります。

「言問はゞ、こゝより問へよ、足曳の

山彦ならぬ、答をぞせん。 前中納言持豊」

これが有名な鸚鵡石です。

歌の通りにこゝより向ふの山に向つて「おうい」を問うてごらん下さい。「おうい」を答へます。

「馬鹿あゝ」やつぱり「馬鹿あゝ」山彦ならぬ、はつきりした聲でさなり返します。

全く不思議な石です。

龍 頭 ヶ 瀧

人

山端は池田村の端の部落です。

こゝは年寄連が城山の元といつてゐます。古く御城のあつた所ださうです。

龍頭ヶ瀧は山の中にあります。山道を東南に行くに、ザア／＼水の音が聞えます。思つたよりは水は少なくて、

申譯位にザラ／＼落ちてゐます。でも大雨でも降ると、谿谷を奔馬はせて来た水は、この崖にかゝつて、直

下幾丈といふ壯觀を見せるさうです。

瀧壺は流石、青潭たる淵をなし、坐る夏を忘れさせます。

龍頭ヶ瀧といふのは、何からつけられたのでせうか。こんな話もあると言ひます。

その年は春から夏にかけて、雨が一滴もふらぬ大旱だつたさうです。御祈禱、おまちなひはもこより、ごまを

焚く、御輿をかつぐ、雨乞ひのあらん限りをつくしましたけれども、さうしても雨が降らないので、お百姓たちは

はどうにでもなれまして鉢になつてしまつたのです。

神

こんな村人の中に、たつた一人、信神深いもく兵衛さんといふ爺さんがありました。深く龍王の加護を頼み、この瀧へ丑禰時の詣をしました。

恰度三七二十一日の禰願の日です。よく晴れた星空を仰いで家を出たもく兵衛さん、夜なれた道をまほ／＼とやつて来るに、瀧のへんからあやしい風の音。はてな少しづつ近づいた爺さん、何を見たのか、尻餅をついたこ

こです。

それから暫く後のこも。俄の大夕立に夢をさました村の人。つゞいて村人の龍頭ヶ瀧に続く提燈の火が、豪雨の中に見えました。

言

村人に助けられて歸つた、もく兵衛さんの話がかうでした。

爺さんが、瀧の頭に至つた時夜目にも著き紅蓮の炎、瀧壺からのぞいた龍。一目見た爺さんは夫限り気が遠くなつてしまつたのださうです。

思ひがけぬ豪雨にあつて、よろこびあつてゐる人々はやがて「もく兵衛さんのお蔭で龍王様に救はれた」といひふらすやうになりました。

このこもあつてから、龍頭ヶ瀧いふやうになつたさか。

明けずの長持

一

吉川には八幡様があります。

この八幡様に明けずの長持と言ふ寶物があるさうです。一体さうしたものなのでせう。

こもは八幡様造營の昔にかへります。

「この度、八幡様御造營に當つてはこの近在ならぶものなき御社に致さうと思ひますが」

こんな相談があつてからは、俄に大工もこのへんのはよして、都の大工を呼んで建てさせるこもになりました。その時分、都には飛驒の工と言つて名うての大工さんがありました。釘一本使はないで、家を建てたり、それはく名人でした。

この人を無理に頼んで来て貰ふこもになりました。都からこもまで来る言ふのには、汽車もなく、歩いて來るので、仲々日数が立ちます。こちらの方では立てるのを急いでゐます。けれども

「有名な大工さんのこもだから、お弟子も澤山あるだらう。心配することはない。こもみんな安心して待つてゐました。

二

こもが、いよくやつて來たのを見るに、何が弟子こもではありません。たつた一人の子供に道具箱を持たせて、さつさとやつて來たものです。

村の人はたまけてしまひました。

これではいかぬ、外の大工を頼まねばいふので、恐るく飛驒の工さんに伺ふに「いやそれには及びません」といふのです。

し方がないので見てゐることにしました。

遠い路を歩いて来たのですから、その日一日はゆつくり休みました。

さて明るる日は早く起き、清水で身を清めました。敷地のぐるりは、暗い間から、京の大工さんを見ようと押寄せた人で一ぱいです。

飛驒の工は、出てくるに、すぐその邊から一抱もあらうと云ふ大きな木をはこんで、木小屋へはいつてしまひました。

のみの音だけは聞えても、何をしてゐるのか、一向分かりません。その日は暮れてしまひました。次の日、暗い間から

「ゴキリ〜」

「カツツ〜」

「コツツ〜」

鋸の音、槌の音、鑿の音、がやみこなしに聞えて来ました。

人々がその仕事場へ行つたとき、そこに見たことのない小僧さんが、とても目の廻る程働いてゐるではありませんか。

見てゐる中に人々はあきれてしまひました。

物を一口言はないのです。しかし此のことはさう不思議な一つではありません。誰でも一心になれば無言になりますから。目の玉が動かんでありませんか。生き〜とした目なのから、魚の目のやうに一所だけ見て、またよきをしなのです。

「アリア〜 アリヤリヤ〜」

見てゐる中に益々びつくりすることだらけです。

皆さんもうお分りでせう。

この小僧さんこそ、昨日飛驒の工が一日かゝつて作つたものなのです。

三

かくして、自分の片腕が出来てからは晝夜兼行、只管工事の竣工を急ぎました。

名工にさうしてそつがありませう。約束の日までにはキチンと仕上げてしまひました。

やがて祝の宴も初まらうとする時、工は、白木の長持をかつがせて、神主の前へ出。さて、

「この中のものは神意のこもつた貴いものです。ついでには未長く神の御側につくべきものと思ひます。もし萬一のことがあつてはと思ひますから。」

と言つて堅く蓋をし、釘をうつて差出しました。

之が今も傳はる明けすの長持です。

むかしのならはし

縁側におばあさんが腰を下ろして居られます。今年八十五ださうです。昔話をして貰ひます。

「今頃は結構なもんぢや、わし等がこまいときにや、今のやうに、米や麥などは喰べたものぢやない。村一の庄屋様が、食べられよつた位のものだつた。大抵のえが稗や蕎麥。

それに今頃こんなことを言やあ、ほんにすまいが、道べりの草や木の葉をたべてゐたんだ。それ山のほの葉もかな、くさぎな、おばこ、たんほまか言ふ様なものをな。それでも仲々うまかつたぜ。

「夜うさかいふて、今あ、電気ちう結構なもんがあるが昔は貧相なものだつた。

行燈を使ひよつた。それかさいふで一軒にまあ一つ、小さい灯をともしてなあ、上り間にをいてあつたら、奥の方は手さぐりで、物を探さにやあならん位だつた。この行燈ですら油が入るくくいふて土器へちよつびりついで心言ふたらまことに短く、二分も出したら大吐られぢやつた。心つてそれさういひさ。

行燈からランプになつたときにやあ、石炭は何ちう明るいものかと思つてつたら、何が、今は電気の世ぢや。「おばあさんらあ、おまへらあ大昔のやうに思へるだらうが、まだく古い話をすれば、お前らのひいぢいさ

んの代などは、行燈すらなかつたんだぜ、松明をもやしとつたさ。

大方その時分の人あ、色が黒かつたらうぞい、さうしてつて、松割木をたいて見い、かぢりが出ようが。

あれく、年中たいとつたんぢやけん、よつほど黒かつたらうぢやないか……」

おばあさんはたいしたしやれでも言つたつもりか、しきりと笑はれました。

「こころでよさうく」といふのを「も少し」言つて無理にお願する。

「昔の人さいつたら、わけの分らぬことをしよつたもんぢや。男でも女でも六七十年にもなつたら、若いもんが「隠居を片づけにやあいけん」ちうて、夜うさり、山へ捨てに行きよつた。そら向ふの山つてノ一（指でさし乍ら）その年寄を捨てよつたんぢや。

日も暮れて、え、月ぢやミ縁側に立つてるるさ、山の中から黒い影が走つて出てくる。

「また、捨てたんぢやなあ」と思つてるるさ、案の定、山の中から念佛の聲がしよつた。捨てられた爺さん婆さんはあくる朝までにはことぎれよつたさ。

さうぢやくおばあさんも世が世ぢやつたら、ミつくにお山の中さ」

おばあさんはうす氣味悪い笑ひ方をせられ、しはぶきをして、次の話をされる。

「ぢやから人間つてものは賢うになけりやいけんのぢや。自分を生んで下さつた親御をすてるなんて無茶なことがあるものかなあ、今時の子供は皆學校へ行くけん、よう物が分つさる。

その頃は大概に盗人が多かつた。さるばつかしてなく、つけ火をしたりするんちや、家でもくらでもごこなあない。喧嘩太郎も多かつた。何ぞしたら人をたゝいたり、人の家へ暴れこんだりなあ、気が荒かつたらう。それ今いふ物の道理が分らんから、少しのこゝにでも腹を立て、無分別のことが出来よつたんぢや。』
教訓めいた話になりました。何事も長く世を渡つて来た経験から話されることですから、よく耳をほつてきいてをくことです。

民 謠

こんなうたがあります。

- 一、岩屋に鬼の城、鬼のかま。
 - 二、登良の峯からみおろすみつ木の櫻は吉野にまさるかな。
 - 三、出むかひじんべんで垢離をこり。
 - 四、天柱山で行を修し。
 - 五、鸚鵡石より向ふに見ゆる龍頭ヶ瀧。
- 三ツ木には櫻の木があつたのです。今もその古木が残つてゐます。さんなに美しかつたのでせう。吉野に勝ると言つてゐますね。

登良山には寺があつたさうです。

天柱山にはその頃、石槌様（四國の石槌山大権現）の神体として、石佛様を勧請し、仲々御發行だつたに申します。頭に頭巾、蓑掛、袈裟かけ、金剛杖の行者が、チャリン〜ミ、塔坂峠から三ツ木を経、山裾に沿つて一本松の所へ出てくる、舊道を通つて居つたものでせう。この歌もこれらの人の間に歌はれたのかも知れません。

猪 の こゝ

八重栗にはいゝ松があります。笠松といふ大へん、よい名もついてゐます。
その笠松も小さかつた頃でせう。
何でもあのへんに、猪が出て、作物を暴しまはりました。そこで山から島へ出て来ない様に石垣を築いて、やつし防いださうです。
今でもあのへんへ行くと、石垣が残つてゐます。（井の原も猪の原か）

楨 谷 焼

四五十年昔のこゝです。
本村に平田鹿治といふ人がありました。

この人が窯をつき、瓦や甕や茶碗・徳利のやうなものを焼いてゐました。焼きいひ、くすりいひ申分なく、横谷焼きいひつて、評判も大へんよかつた相です。

所が備前の伊部から「焼くことは相成らぬ」を差止めて來ました。それからふつつり止めて仕舞つたのです。

災 難

五十八年程前に、大へんな早がしたことがあります。それがために米が取れないので、ひどく困りました。それがために横谷では強訴のやうな騒動がありました。

明治十三年、十九年、二十六年、も厄年でした。

十三年は洪水。十九年は未時の飢饉いひ、二十六年は辰の年の洪水いひつて甚しかつたやうです。

この時には随分家も流され、死人も多かつたやうです。

この前後にコレラがはやつたこともあります。コロリコロリ云ひまして、防疫の手段もなく、澤山の患者は斃れました。

鑛山のこごごも

下横に銅の出で居つたことがあります。大笹鑛山がこれです。しかし之は今では廢鑛になつてゐます。

以前のこごごもです。

突栗へ突然、吹屋から何十人といふ工夫がつるはし等をもつて來たこごごもがあります。

「金が出る」といふて、今の突栗驛の北の方を、掘つたさうです。

出たか、出なかつたか。出て居れば金山も出來てゐませうが。

こにかく一時は大騒をしたものです。

地 人

人といふものは土地がなければならぬこごごもは始めに教へました。「人は土地をどんなに利用するか」こいふこごも調べなければなりません。土地と氣候、又土地と水との關係、昔はさうして山を、今はどうして平野を利用したか、又するかといふことは、地理をしらべる上に最も大事なこごごもで、之からだんく地と人について調べてゆきます。

家いへによる村むらの姿すがた

人生じんせいと衣食住いしょくじゅう

人間にんげんが生活せいかくわつして行く上うへに、さうしても切離きりはなして考へるこゝの出来ないのは衣食住いしょくじゅうの問題もんだいです。

人間にんげんが凡ての活動くわつどうをなすのには、その活動くわつどうをさせる力が必要ひつやうです。その力は、エネルギーと言ふのであつて、之は種々しゆしゆの食物しょくぶつの中の成分せいぶんから求めなくてはなりません。「腹はらがへつては戦争せんそうが出来ん。」と申しますが、人間にんげんはたなくては生きて行かれないのです。

又人間またにんげんは温度おんどに支配しはいされます。常温じやうおんなる体温たいおんを保てる人間にんげんは、外界ぐわいがいの温度おんどがこの体温たいおんより、高ければ暑い感あつじ、若し低ければ寒い感さむいじます。而して人体じんたいの諸器官しよくわんは、適當てうたうの温度おんどに於てのみ最もよく活動くわつどうし、これ以外いげいには、その活動くわつどう力は鈍り、甚しき、高温かうおん低温ていおんにては全然活動ぜんぜんくわつどうが出来なくなるのです。

こゝに於てか人間にんげんはこの適當てうたうした温度おんどを保つべく衣服いふくを着、住居ぢゆうに住するのです。

〔住家ぢゆうか〕住居ぢゆうの一形式けいしき〕については、此の外ほかに防禦ぼうえいの意味いみが含まれてゐます。人間にんげんがまだ開けられない以前いぜんに於ては、猛獸まうちゆうの争あそひ、漸くしては他人種たじんしゆの戦争せんそうしてゐましたので、身を守り防まもぐによきものによらなければなりません。こんなこゝからも考へて住家ぢゆうかは作られたのです。

人間にんげんが或地あるちに、定住ていぢゆうするには、この三つのことが都合よく行くやうな所ところを選びます。

土地ちと家いへ

既に人間生活にんげんせいかくわつと衣食住いしょくじゅうのところで、お知りになつた通り、家は人間にんげんが生活せいかくわつして行く上に極めて關係かんけいの深いものです。

一体人間たいにんげんが生活せいかくわつして行く上うへには、自然しぜんから受けるさしひびきが仲々なつか大きいのです。

國くにの東西とうせいを問はず、南北なんぼくを論ぜず、地理學ちりりがく的關係かんけいよりして氣候きこうの支配しはいを受けねばなりません。そこで、人間にんげんが住む位置いちによつて、衣食住いしょくじゅうが異ふのは當然たうぜんの理ことわりであります。シベリヤの北部ほくぶ、アイスランド地方ちほうに住むエスキモーは毛皮けうひを着て、海獸かいじゆうをたべ、テント又は氷窟ひやうくつ（氷の家）の中に生きてゐるのに、アフリカにすむネグロは身につけるのに衣物いぶつは要りません。僅わずかに、芭蕉ばしやうの葉はを腰こしにまきふだけ、たべるものは椰子やしの實み、住居ぢゆうは茅かやの小屋こやです。このやうに同じ人間にんげんでありながら、斯かうまで違ふはそも／＼何なにによるか、と申しますれば取りもなほさず、地理學ちりりがく的關係かんけいよりして、氣候きこうの支配しはいを受けるからです。

この事は裏うらから言へば、人間にんげんが生きて行く上うへには、その地ちに適應てういした生き方をしなくてはならないといふ意味いみになるのです。人間にんげんは土地ち（従つてそれより起る種々しゆしゆの關係かんけいに支配しはいする）を離れては生きて行くこゝは出来ませ

家などもつまりこの生きんとする工夫のあらはれであると見るこゝが出来るのでありまして、一戸の家の構成には相手たる自然（土地）の種々の點（地理的要素）が取入れられてゐるのであります。

分りますかね。よく分るために一二の例を話して見ませう。

北陸地方（親不知の難所・高田・新潟の地方）を旅行した人は家の恰好の變つてゐるのに驚かされます。それといふのは、屋根の勾配（傾き工合）の急なこと、さうしてこれを葺くのに、薄い木片でし、その上に小石をころくすけてゐるのです。

何故こんな風に屋根を造るか、これがつまりこの地方の地理的要素の表れたものなのです。

屋根の傾き工合の急なのは、雪のすべりをよくして、あまり積らないやうにするため。木片で葺くのは屋根を軽くするため（雪が積るので、出来る丈軽くする必要があるから）と、も一つは瓦などではしみて破れるおそれがある爲。小石ををくのは、この木片が風の爲に散らないやうのためです。

でこのことから、この地方が積雪の地（高田など、習つて知つてゐるでせう）であり、風が烈しい所であると言ふこゝが分ります。

も一つは沖縄縣の例です。琉球の家には、家よりもつゞ高い石垣かへいのやうにかこうてあります。

もし皆さんの中に二十日前後の新聞紙を見る人があるなら、暴風の進路が、よく分る筈です。大抵暴風雨はまらかひなくこの沖縄を通つて進みます。その時は鐵柱などはぐうぐう曲つてしまふさうですから

如何に烈しいか分るでせう。石垣は風よけのため。大風が吹くから石垣が出来たのださかう言ふ意味にすぎると、家には自然の姿が現はれてゐるものだといふこゝがお分りです。

文化と家

それから家は人のくらし向きを表はすものであります。（富限者なれば、その家は大きく、貧乏なれば小さいと言ふやうなことよりまだ外に）

例へば商賣で暮して行く家には、店の間さいふ特別な室の設が必要でありますし、お醫者ですと、藥室なり、診察室などがなくてはなりません。こゝに於てその家を見て、そのうちのくらし向が分るわけです。

この他、住む人の趣味（すき好み）も現はれます。咲く花の匂ふが如き奈良の都、青い屋根に、丹の壁、誠に目ざめるやうな美しさは、これ奈良時代の人の心の表れなのです。

長崎の出島はどうです。日本風の藁ぶきの家の立つた丘つゞきには、まるで竹に木をついだやうに洋館が立つてゐたではありませんか。さちらがよくひらけてゐたかお分りです。

つまり家を見てその民族の文化が分るのであります。家は文化を表はします。

丸木を突立てたばかりの掘立小屋に、天を摩する何十階といふビルディングとは、その形の違ふ程文化にも差異のあるこゝを物語つてゐるのであります。

家ご池田村

前にいつたこもをもう一べんいつて見ます。

一、家には地理的要素が表れてゐる。

二、家には住民の文化が表れてゐる。

このこもをしっかりと覚えて置いて下さい。

かういふ見方から、この池田村の人家について考察を進めて行きます。

先づほんごが農家であるこもが分ります。それは、一、家の南側に広い空いた土地（かき）のあるこも。

二、東側（または稀に西側に）納屋のあるこも及勞役に使用する牛（又馬）を飼つてゐる、従つて家の建物を

として牛小屋が有る。このこもによつて知られます。しかし全然農業だけで生活してゐない。他に生活の資源を

持つてゐることが表れてゐる。いひかへれば農業より他の仕事を持つてゐるこもです。木小屋があります。薪等

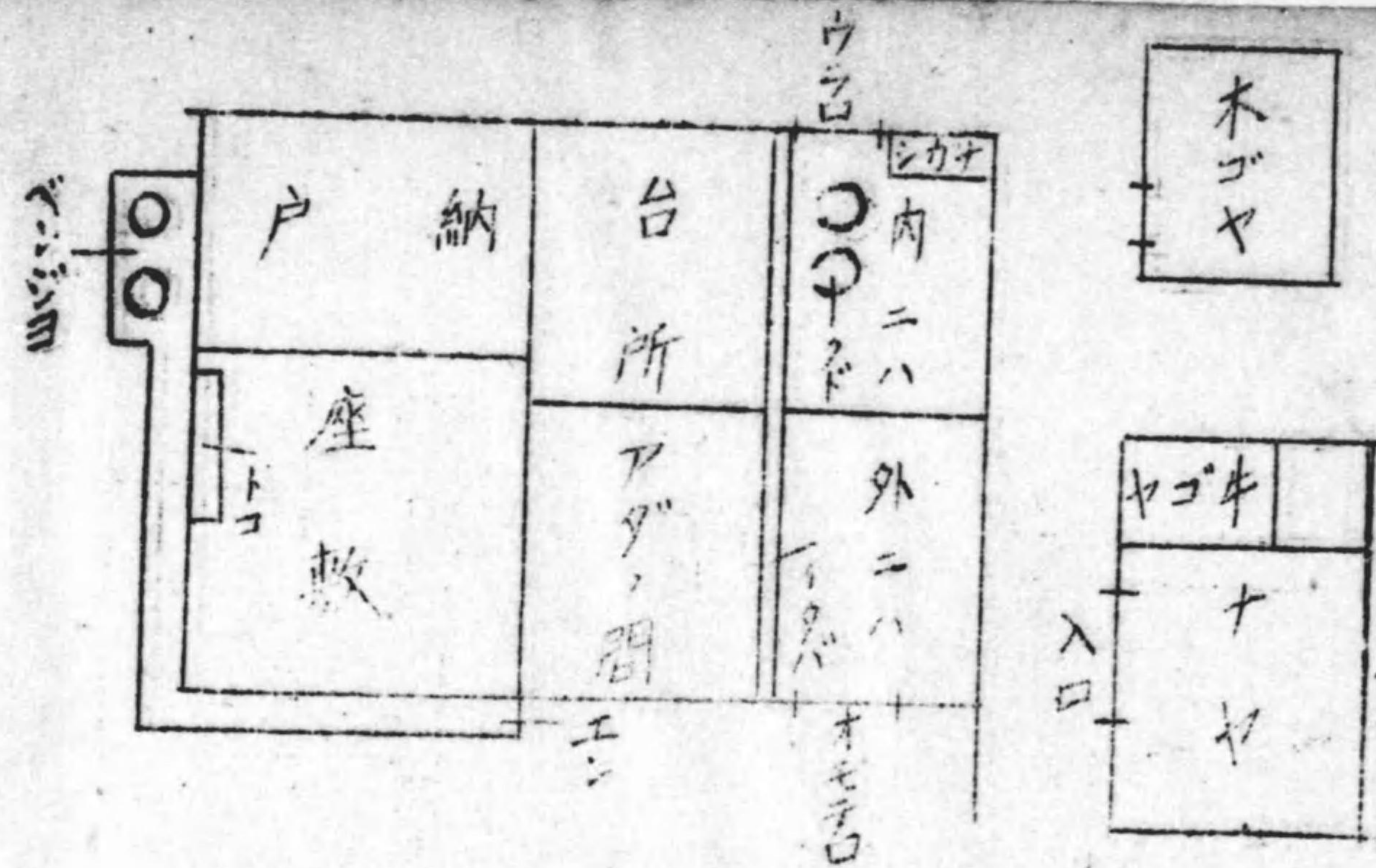
を積む所が設けられてゐるからには、山林がなければならぬと、かく推理し得られるのであります。

農専らではやつて行けないこもからは、田地が少ない、溪間の地か海岸の地であらうこも言ふ地勢の想像が

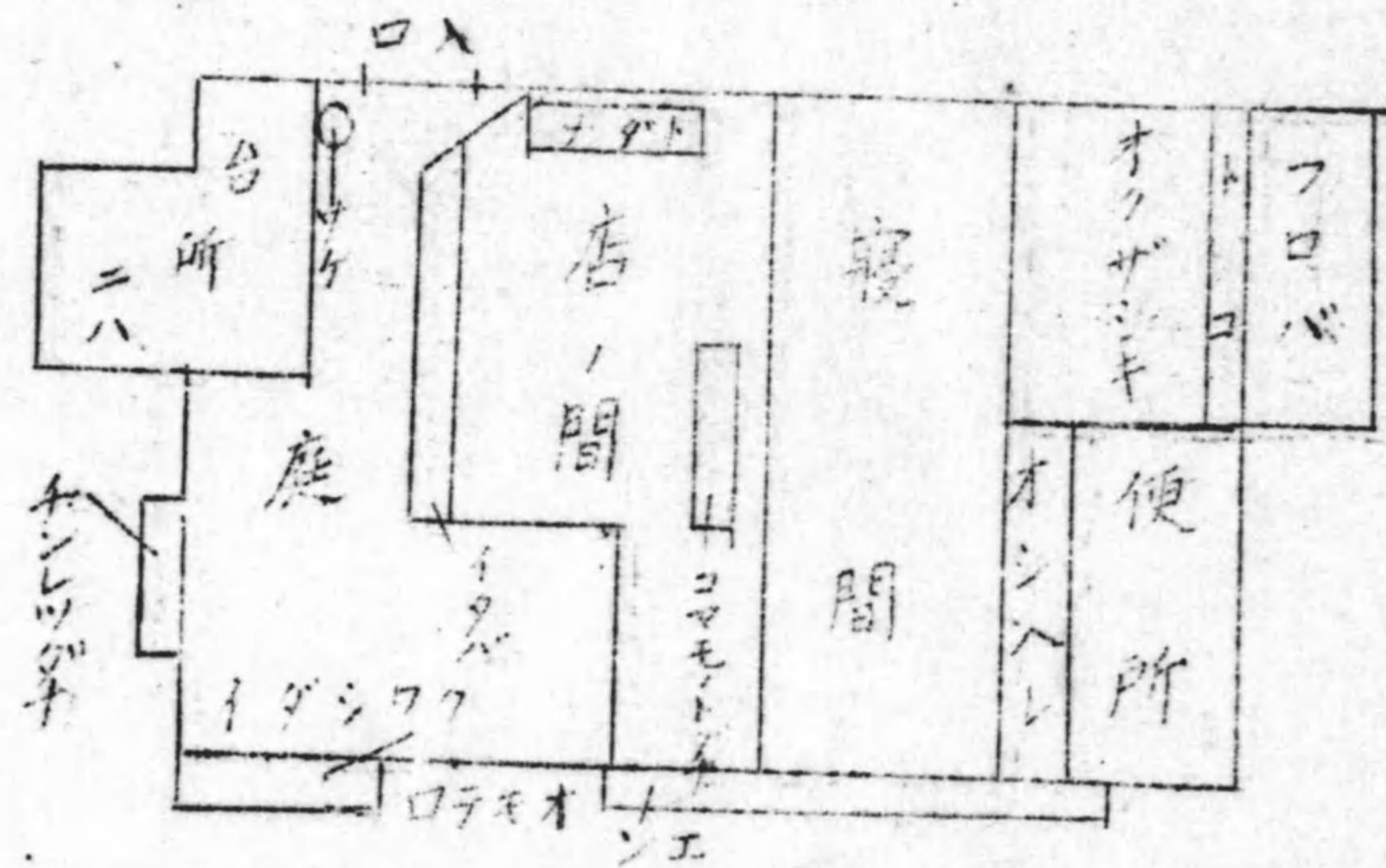
つこのです。（本村は溪間）

次に上横地方では蔵室が多く見られます。しかし下横では別に蔵室としてはなく、假に主屋の或室が、多く使

第一図

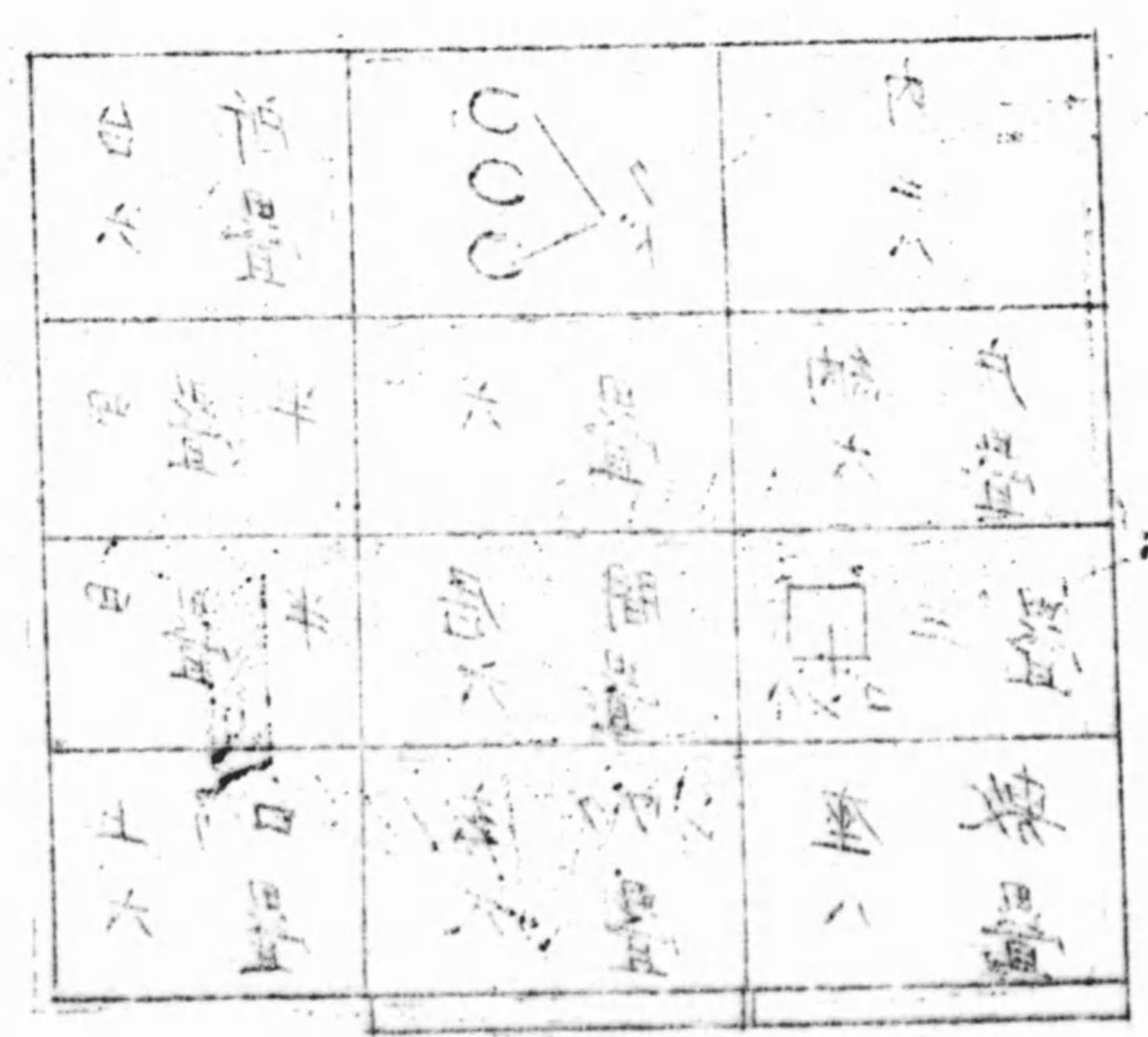
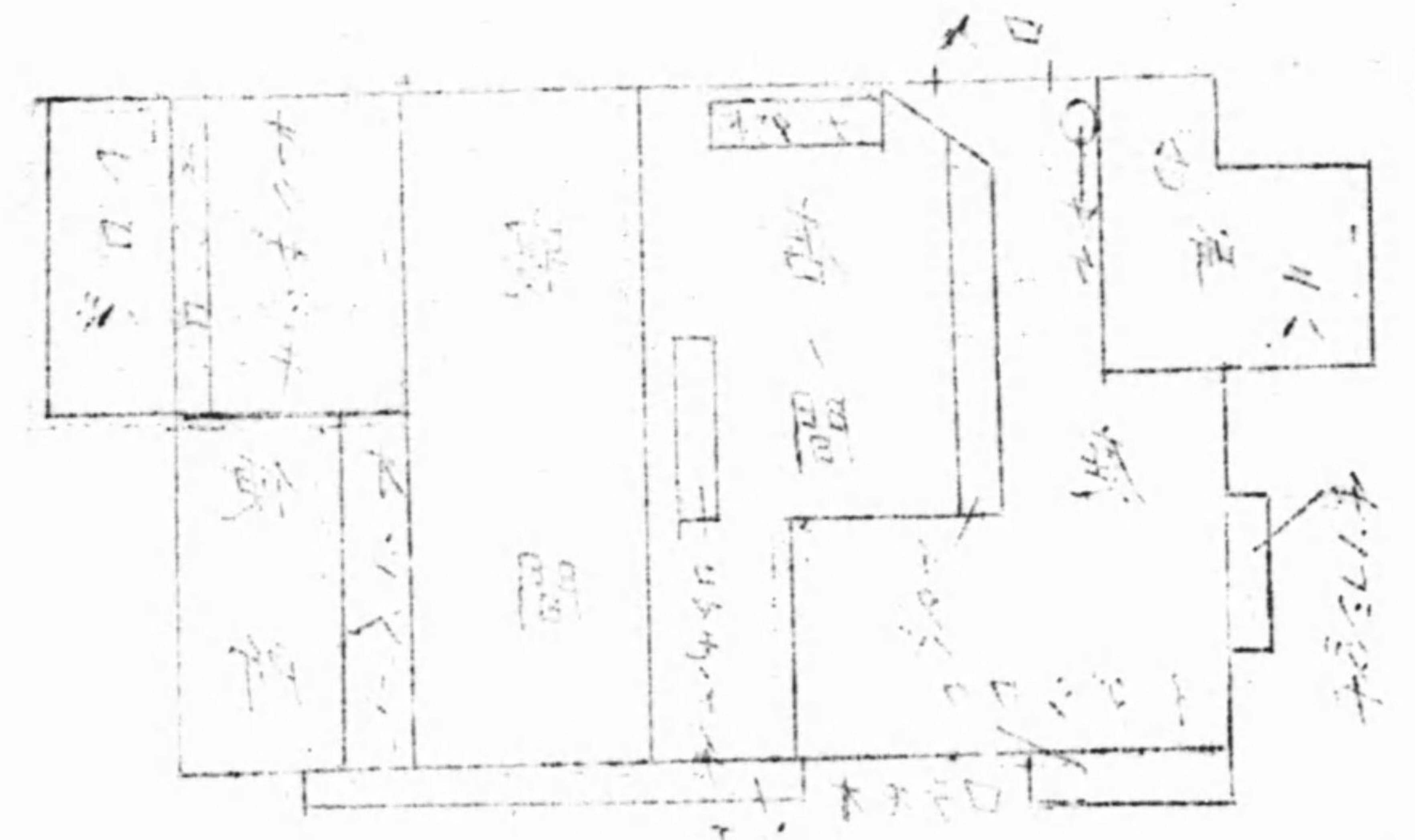
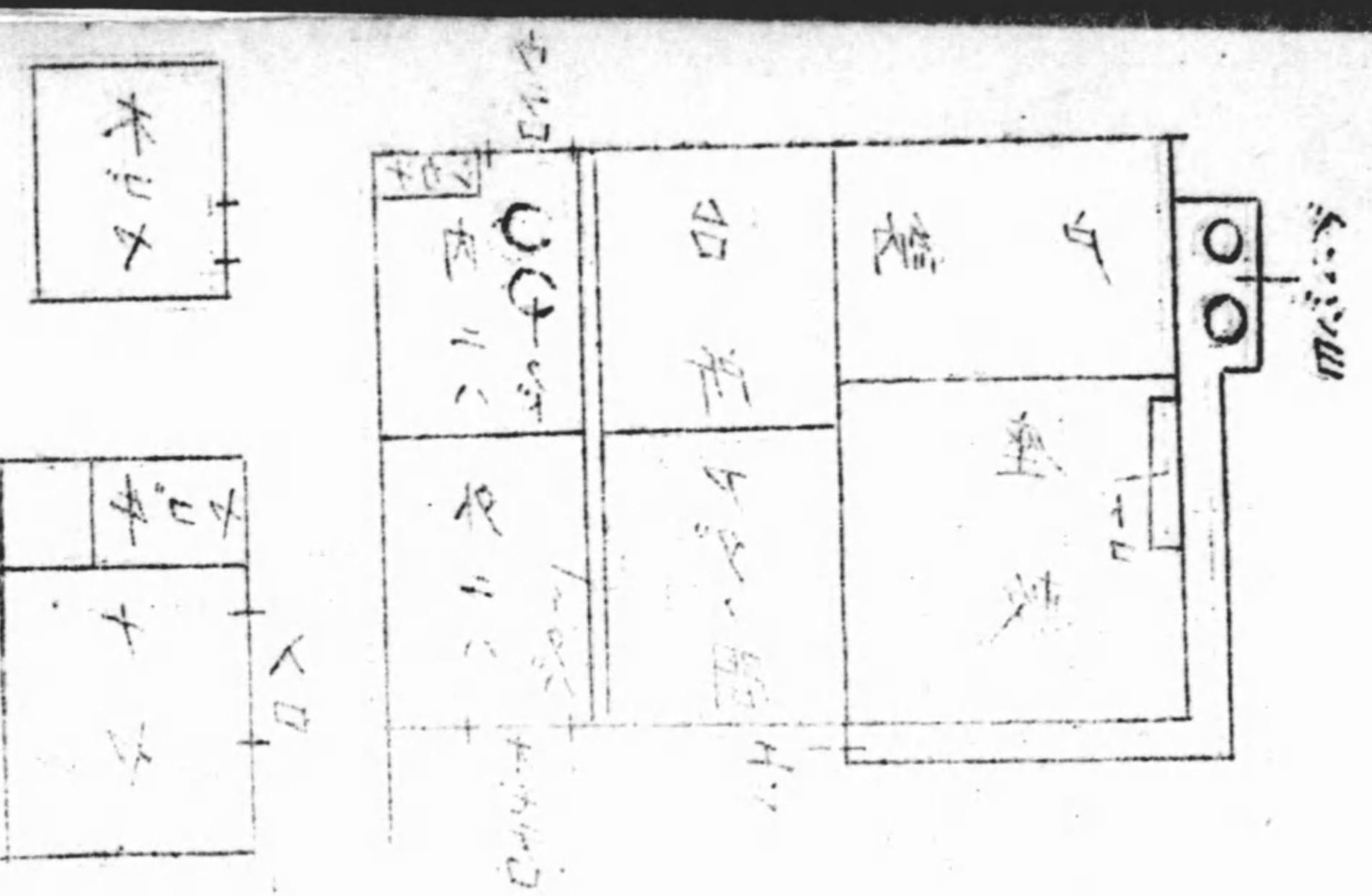


第二図



第三図

内ニハ	所畳	台六
戸畳	納六	半畳
座三	間畳	居六
敷畳	座八	口畳



第一圖

第二圖

第三圖

はれてゐる様です。このことについてはいろいろなことが考へられます。まづ養蠶發達の程度が分ります。上横が早い、下横及これから下の方が早い、又さうしてこんなに違ふかそれには何か養蠶が土地に適不適があるためではないだらうか等と。さうして總体に池田村は養蠶が最近起つたものであることも分るのであります。(副業の所参照)

その次は、牛小屋の位置です。多くは主屋の中(入口のわき)、長屋の一部に儲へてありますが、(これは見延に多い)下横では牛小屋が別に立てられてあるのを見ました。又便所も牛小屋が引つつけてあるのを見ましたこれは牛に對してきたないものだこの觀念が出来たからだと思ひます。(これなまは人間の考へ方の變りつゝあることを知らせるものだと思ひます。)

主屋の間取は大概どれも共通してゐるやうに思ひます。表口(多く南が表です)裏口、入口を這入るご土間、(外庭と内庭)土間から座敷へ上るところは板張り、南側があたの間、その北ひらは台所、(しかし大概の家は此の間を、中の間とし、内庭を台所に用ゐてゐます。)台所の奥は納戸、納戸の表ひらは奥の間とかうなつてゐます。(家第一圖参照)

而してこれらの家を外廓的に眺めますに、葺き物もあれば、瓦ぶきもある、があまりたちは高くなく、破風の差でない恰好です。さうしてそれにふさはしい、板戸、障子張りです。しかし近年は硝子が多く用ゐられるやう

になつて、洋風に近いやうな感じをさせます。
 それにしても穴栗は餘程、近代化されてゐると思ひます。まづ穴栗驛のバラック式が目につきます。それよりも、公會堂がうまく洋風に立てられたことは、何だか新しい空氣がはいつたやうです。驛附近の店屋の簡単な構造も注意する必要があります。(家第二圖)穴栗は要するに、土地が土地なので、都會化されてゐるのであります。

此の外に變つた家を見て見ませう。

保木の駐在所、役場、學校、(お役所式の家であつて一般の住家より異つてゐます)

穴栗の平田靜氏宅の大きい構には驚きます。(家第三圖)

市場の故小倉務氏宅もその家構へに外庭の老松を見るこいかに村の舊家らしい感じがします。昔備前の儒者武元登々庵が豪溪に遊んでの歸路こゝに休憩して一詩を賦したのは有名な話です。今尙其の當時の筆になる書幅が

この家にあります。

向郷の瀬(お宮の下)の呉服屋、あれなきはこの村に三つてはよほぎ新しい家だと思ひます。露台(バルコニー)のある所なきは特にさうです。(家第四圖)

それから上横に、アメリカから歸つて立てた立派な家が二軒程あります。

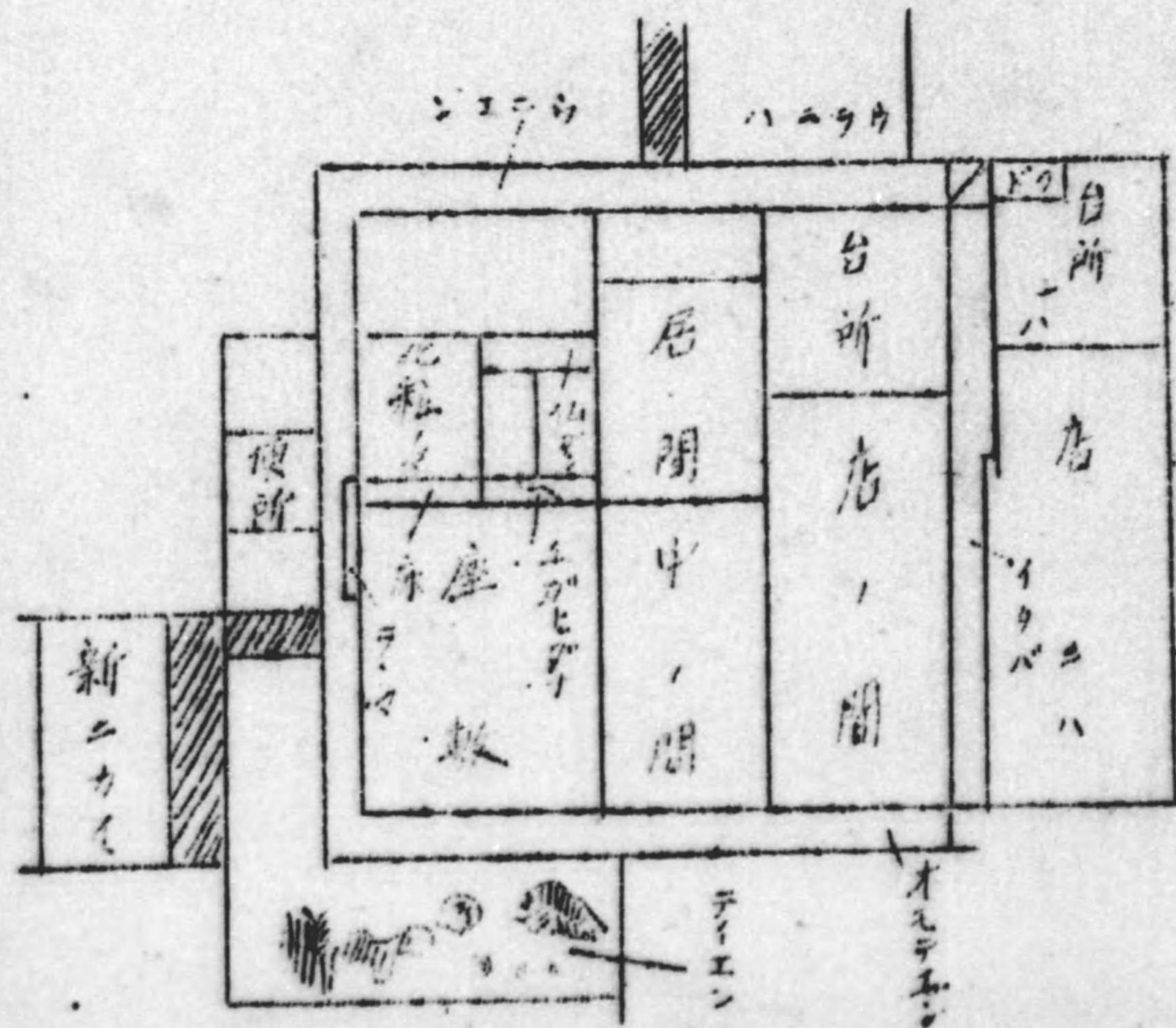
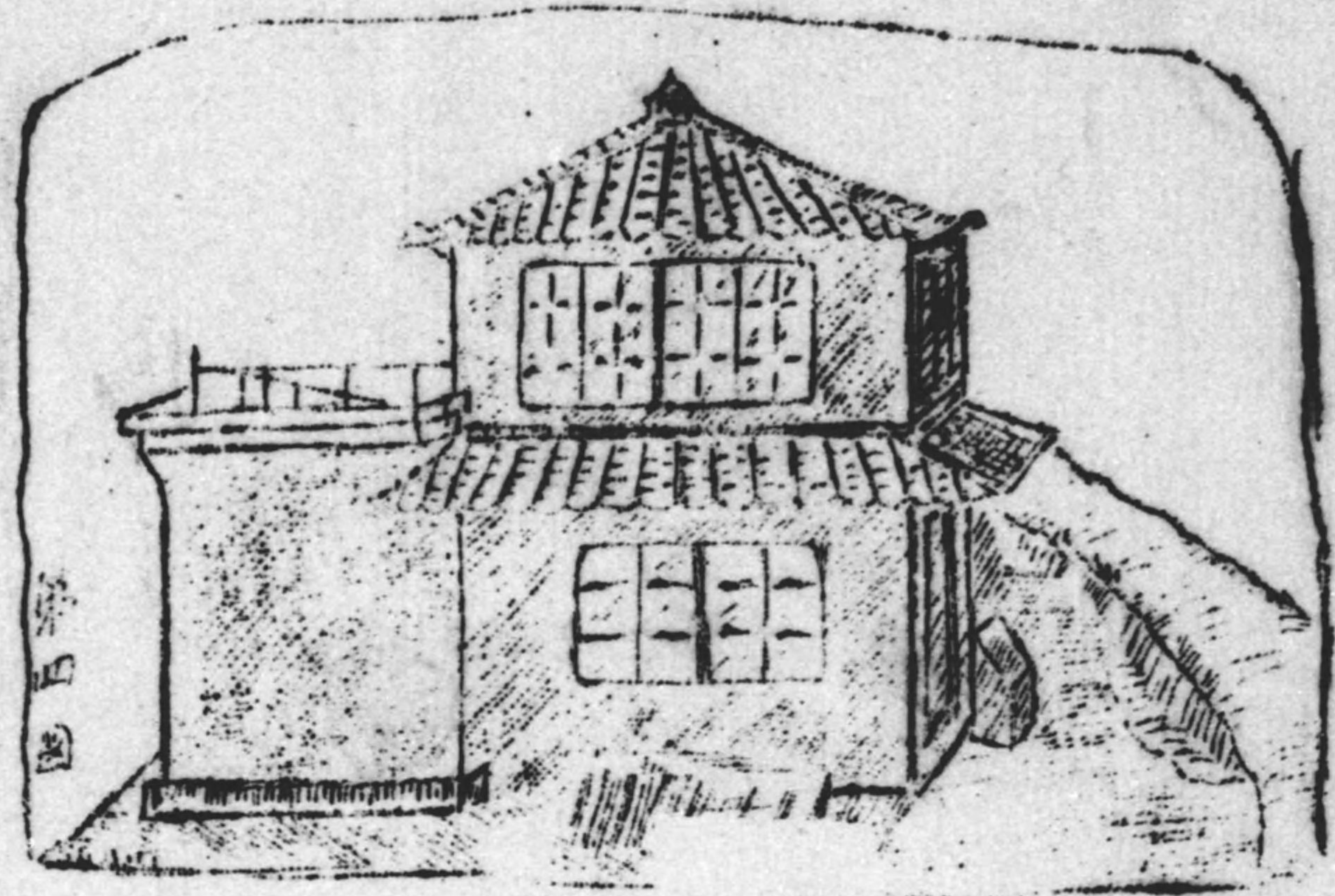
角野要平氏宅には觀費用としての庭があります。(家第五圖)



卯辰圖 (五五)

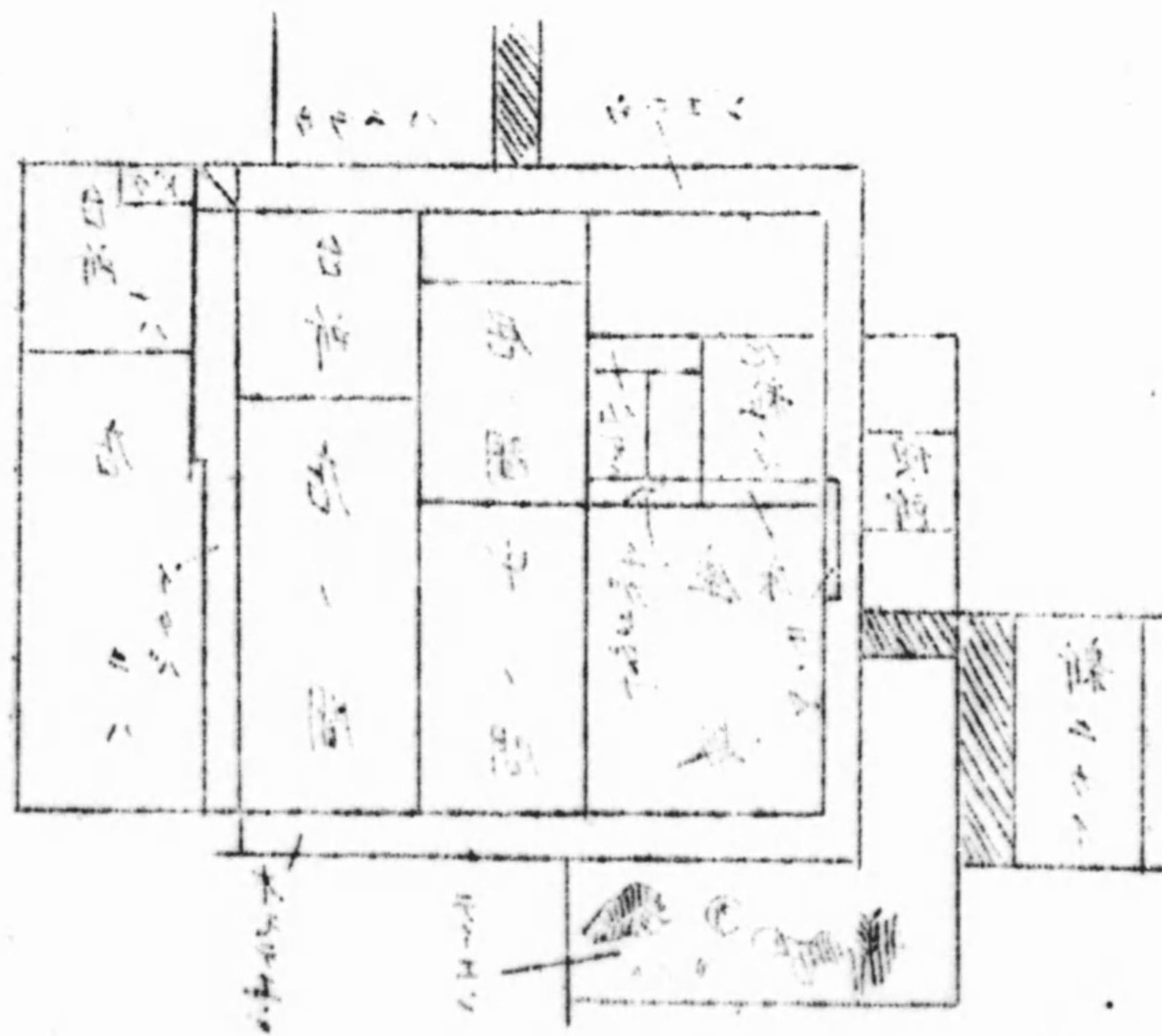
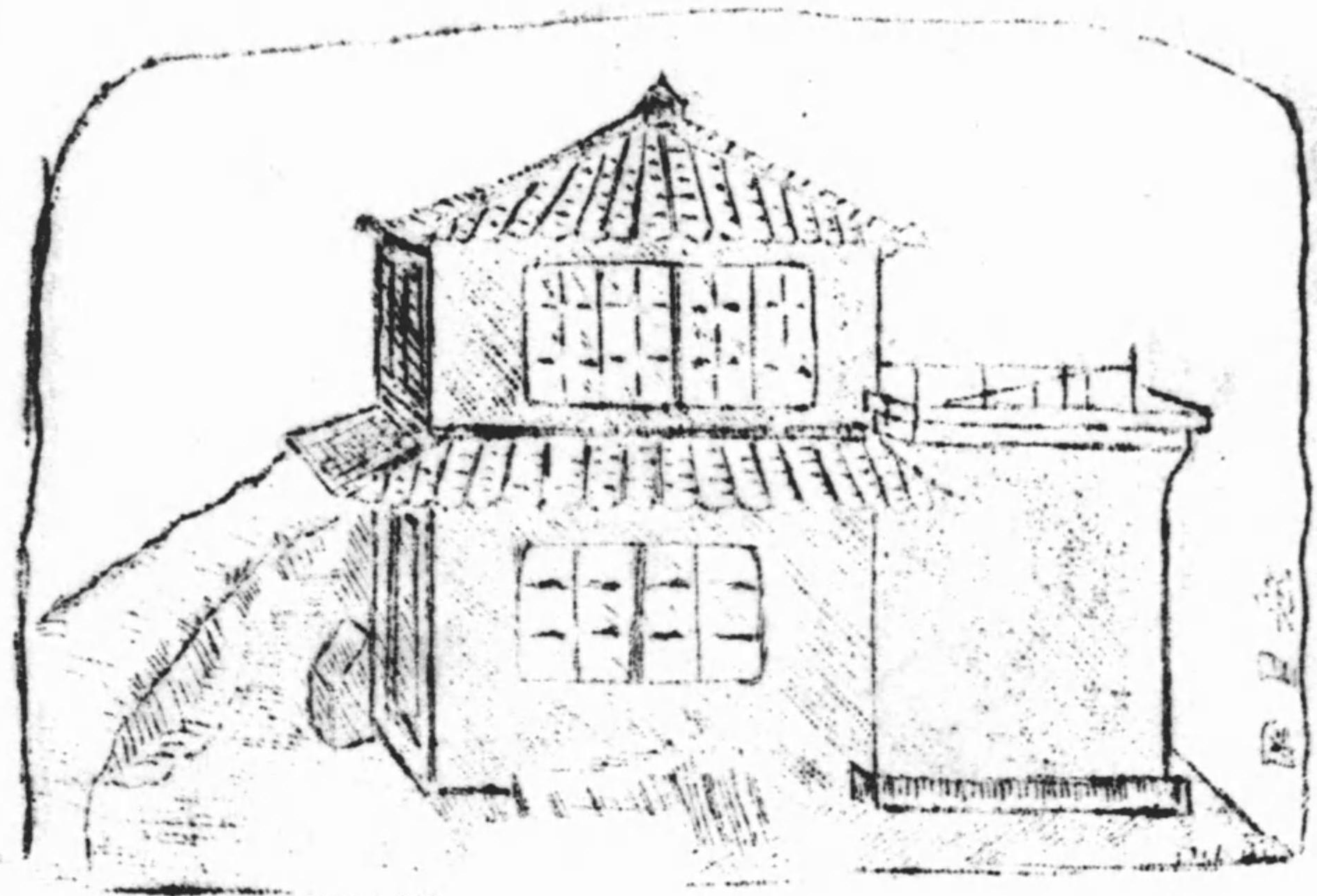


- | | | | |
|-----------|---|---|-------|
| ◆◆◆◆◆ | 國 | 外 | } 境 界 |
| — — — — — | 縣 | 府 | |
| — — — — — | 市 | 郡 | |
| — — — — — | 村 | 町 | |
| — — — — — | 地 | 官 | |
| — — — — — | 類 | 地 | |



第五圖





築五圖

一体自然を相手とする田園生活者にはこの設備が必要でなく経済上の餘裕のないかぎり、造りません。工業者に
 とつて初めて必要となるのであります。生活の相違から来る家のちがひだ一言へませう。
 あの黒ずんだ大きな酒倉もあり見られないものでせう。
 山村の家の特徴として、屏のないことに注意する必要があります。
 氣候が特異でないのに、家にはつきり見えてのませんが、それでも挙げれば小さいことではあります。社
 総社あたりでは赤瓦を見ませんが、この池田村では赤瓦がふいてあります。
 赤瓦を使ふのは、裝飾のためでなく、冬、普通の黒い瓦であつてはしむられる（特に北側の屋根）から、しむわ
 れないこの瓦を使つてゐるのであります。

水と家

居住と水

五八

我々の先祖は水の得易い所に住んでゐました。

皆さんは水は人間にまつて如何に大事なものであるかよくお分りませうね。

御飯や御菜を煮るにも、飲料にするにも水、顔を洗ふにも、風呂を沸かすにも水が必要であります。

植物の成育にも水を絶すことは出来ぬ。稲を作るには水が最も大事です。

水がなかつたなら水田は作れない。

ですから人間は必ず水のあるところによつてゐます。

水のない所には人は住んでゐません。

武蔵野の例を取つて來ても、入間郡・多摩郡地方がまだ開墾せられてゐないで、昔ながらのさびしい武蔵野の特長を残してゐるわけは、この地方は水を得るに非常に困難で、これがこの附近の長く開けなかつた大なる理由になつてゐるのです。ところが二郡の境をなしてゐる狭山の方は内力の結果隆起した場所で、水をためた地層が、まごころく地面に露出してゐるので水が容易に得られます。又雨が降つても小川が出来易い、かくして狭山は早

くひらけたのです。

かやうに人間の住む場所と水と云ふものは關係が深いのです。部落がそこに出来てゐるのは、そこに水があるからです。へもこよりの外に色々の理由はありませうが、何にしても基になるものは水です。

屋敷跡の考察

人が家を建てるのに、如何に水のある地を擇んだか今、保木にある屋敷跡の考察によつて知りませう。

それは酒屋の上です。(見延部落寫眞のまごころにその一部が見えてゐます。)

山裾を開いたのでせうが、石垣をつんで、夫々の廣さをならした、いくつもの畑が階段になつてゐます。

東は大分拓いたらしい山あき、西は鉈です。北はやはり山あきを開いた畑で、まもなく谷川。さうしてすつみ學校の方へ丘つゞき。南はつい前が谷になつてゐます。

これで一つ一つの屋敷についてしらべて見ませう。先づ、一番下(即ち西)の南の屋敷です。こゝには南東隅に大栗があります。西側に柿の木、山椒、鉈の垣根に沿つた所に、祠のあまらしい石をつんだものがあります。その他礎らしい石。これらのこゝによつて屋敷跡だといふこゝが感じられます。

しかし井戸がありません。つい前の谷川から水を汲んだか、他から貰つたかです。その北の方に、二つあります。これにも夫々庭木が残つてゐます。さうしてこれにはそれく井戸のあきがあります。その井戸はこのへん

五九

にここにもある泉を溜めるのです。ここは巧に傾斜面を断面にして、その断面から水を出してゐます。それからもう一つは、谷川に面した屋敷跡です。これは明かに谷川から水を引いてゐたらしく、谷川に通ずる小みちがあります。

このやうに谷と谷との中間の傾斜面のやうな、水の得やすい所であればこそ、四戸の人家もあつたのです。でこゝに一つ注意すべきことは、このやうな地勢の場所が他にあつて、そこに人家がない場合があるかも知りませんが、それは位置によるのです。

つまり山陰とか、日の當らないちめちめした所だつたら家がないといふことでもあります。

この屋敷跡は、日當りのよい、南向の場所です。その證據には、屋敷跡にある芭蕉が一丈許ものびてゐることによつて知ることが出来ます。

これで分つたらうと思ひますが、水と人家は切離すことは出来ないのです。

吾々の祖先が水田を作り得る所に居住するといふことは第一番の必要條件であり、殊に南の日當りのよい所、これが村の出来る要件です。

も一つ注意して欲しいこと。それは今日吾々の考からすると、何故に高い所に家を建て、便利な街道べりに建たないかと不審で堪りません。がこのことは充分に研究しなくてはならないと思ひます。

人間居住の必要條件の一たる水のことはすみました。さて、田といふ問題です。

昔の人が粟粟の方から地をひらきくしてやつて来たものであることは、すでに御承知のこと。又保木が險崖であつたことも御知りになつてゐるでせう。そこで地勢上に、今日見るが如きより相違のあつたために、——つまり現在の道べりにはさういふ家は建てられなかつたといふこと——さうしても上方山地を開かなくてはならなかつたといふことがお分りでせう。もう一つは、防禦の必要上から來てゐるのです。言ふのは、横谷川がよく氾濫することです。(これは氾濫の結果です。二三十年位前までは大水が出て居つたさうです。)
險崖である此の地、大水が出たなら必ず危険に瀕することは明かです。

さればかういふ川に沿うた崖の下には住まなかつたのです。

郷土考

松茸の出来る郷土

一、砂防林

地質が花崗岩でありますし、其の上山が非常に急でありますから、風雨の山をあらすことが大へんはげしくて昔は禿山が此のへん一帯にあつたのでございます。所が熊澤蕃山といふ立派な人が、山を禿山にして置くことを非常に残念に思つて、砂防林を盛にしたのであります。それがために此の邊一体は昔の禿山がなくなりまして、今では立派な山となつてゐるのであります。

砂防工事とは雨水を山一ぱいに、そうして同じやうに水を分けて、山の土がもつやうにしたもので、雨や風にうたれて岩がくだけるのを防ぎ、ちり／＼にこさせる方法であります。

その方法は一定の高い低いのない高さに沿つて、後下りの段々を切りこんで、其の上定つた幅をもつ盛土をし之を持ちこたへる芝生を置いたものであります。

かうするご雨水が山ぢゆうに同じやうに行きわたり、段々の盛土を通り、山の頂から麓まで雨水が激しい勢で流れないやうになり、又大雨の時にも濁り水を出さず、静にゆつくり山腹を流れ、あらされた土に一ぱい水

分を持たせ、とける方が盛になつて、早害もないやうになるのであります。

そして砂防工事に何故松を使ふかと言ひますと、それは松の性質をうまく人間が使つたのであります。

一体松は葉を細くして根から吸上げた水分を、澤山空気中に出さないやうにしてゐます。ですから松は少々水が少い所でも平氣で枯れずに青々としてゐます。其の上根を大變地中深くまで伸して倒れぬ爲、又水を吸取るために用心してゐます。

二、松茸と砂防林

松茸は地質には關係がありません。それは松茸といふものは生活力のある松の木の根のはしに、寄生するものでありますから。

そこで松が上根を張らなければなりません。内がはばかり中へくはいる所は駄目です。

松は中年より年をこると、大抵上根を張ります。

ところが地の上に雑草や笹、ぐひのやうなものがかしけり易いところですし、地上をそれらがおそひ、お日様の光も通りませんし、松茸菌も根のはしにつきません。でありますから、岩石の性質には關係しませんが、その岩石のありさまによります。

ごくこみいらす、ごくまばらでもない、少々の下木があつて落葉がある所が最もよろしい。そんな所は砂防林にこした所はありません。

砂防林は表土が淺く、地味は肥えてゐません。やゝもするこあれよう／＼とします。下木もあり、落葉も相當にあります。

松茸は椎茸の様に死んだものにこりついて出来るのではありません。生活力のある松の毛根にとりついて出来るのであります。

松茸は胞子が大きくなるのでありますが、その胞子は十六度（攝氏）で十八時間かゝつて芽を出します。又菌絲が乾燥たならば枯れて死にます。ですから、温度と湿度とが必ずなければなりません。

梅雨時や春雨時分に松茸の生えることがあります。秋に出来る松茸はすつと悪い。それは短い時にさつと出来るからであります。

こに角池田村は昔から砂防林が盛なここ、松の上根を張るに便利な花崗岩でありますから、年々四五千圓も實入りがあつて、村の人々がみんなにこ／＼になつてゐるのでございます。

銅が出た郷土

今から十八年程前、下横西ノ地から黄銅礦が出てゐました。けれども今は洞窟があるのと、そこから下の方に螢がたくさん居らぬこと、昔より鮎が少くなつた、（鮎が少くなつたのは、吹屋銅山が衰へて高梁川に礦毒の流れることが少くなり、自然この方へ増えた）、ここが、銅が出て居つたといふことを思はせるのみです。

一体礦石の出ることは、地下水が炭酸ガスをふくんでゐて、その炭酸ガスがはたらいて、それで礦石をふくんでゐるのです。しかし炭酸ガスは壓へられる力と温度とによつて、一定の働きをするものであります。地下水が岩石の間を流れる時、われわれに沿うたり、岩を破つて流れますが、壓へる力が大きい程、地下水は炭酸ガスを澤山ふくみ、たくさんの礦分をこかすのであります。この礦分をふくんだ水を礦泉と申します。

もしその礦泉が流れてゐるこき、壓へる力が弱くなると炭酸ガスが少くなつて礦分をそこにとめるのであります。

そういふここが出来るのは、岩と岩と違つた岩、（火成岩と水成岩）との間に多く出来るので、池田村のやうな花崗岩だけの岩のところでは、出来ても長く續いてゐません。ですから永く掘ることは出来ないであります。

かういふやうなわけで、銅山は今ではやだめになつたのであります。

水晶山の水晶

花崗岩の岩漿が、粘板岩にあたれば、そのあたつた所は冷えて、岩漿の中の水蒸気はこぼつて、水になる。この水は礦物をこかして新しい岩層の中にはいつて、新しい礦物が出来る。新しい礦物それが此の村では水晶です。

工業のある郷土

六六

池田村の工業といへば酒・酢・醬油・麵類なごであります。

すべて砂層を通つて出る水は飲水として衛生によいこまはいふまでもない。一番新しい砂が出来るのは花崗岩地帯である。

ごみはさられ、有機物はすいとられ、礦物質も抜き取られ、色も臭ひもよくなる。總社町の酒屋が一里もある横谷川まで車を引いて水を吸みに来るのを見ても、どんなに水がよいか分るでせう。

工業は技術と氣候とに關係する。

池田村は氣候が乾燥であるから、雑菌も生れず、造られたものが質がかはらない。

花崗岩地の米は水成岩地の米のやうに碎けず、秋負もせず、米粒にすき間がなくよく乾燥してゐる。

此のやうに池田村の自然に適した工業である。

名勝のある郷土

名勝豪溪こそは我が郷土の誇であります。

池田村と言ふより豪溪のある村と言つた方が人はよく分つてくれます。

豪溪の地理方面の話は既につきてゐますから豪溪の歴史的な話をします。

豪溪は昔から文人（詩や歌を作り、風流の分る人）の間に知られ、これらの人々が度々、この地に遊んでゐます。

備前和氣郡北方の人武元質（登々菴と號し、天柱の二字を刻した人）吉備津神社の宮司藤井高尙（松平定信時代の人で、徳川時代を通じての有名な國文學者）菅茶山（備後の人、頼山陽の先生、世に詩聖と呼ばれる人）それから備前の漢學者の多數、號その名を豪谷と取つた倉敷の人なき、近在の人は勿論、近江、大和、遠くは伊豫のあたりからやつて来て、その時、詠じた立派な詩や、文があります。これらは柴山前中納言持豊卿の櫻嶋石の歌と一緒に豪溪紀勝といふ本の中に收められてゐます。

天柱の字が彫りこまれた由来は、武元登々菴の弟なる武元恒が兄に天柱に書くやうにすゝめたのださうです。所が何にしても地を距る五〇尺もある天柱峯に刻みこむのは仲々の大事です。幸山民團五郎といふあのへんにすむきこりがあつたので、これに梯子をこしらへさせました、大騒ぎしてやつゝ出来上りました。そこで登々菴が書いたのが、さしわたしが三尺もあらうといふ天柱の二大字。それから二人の石工をよんで、ほらせました。日数が十四日。時に享和元年五月だつたさうです。

さて、豪溪があるために郷土がうける利益はさうでせう。人の心を淨化する効は確に大であります。往昔文人の交通してゐた時分には池田村にも詩を作る人があつたこゝでも分ります。これは誠にかけかへの出来ないもの

六七

でして、本村の人が天から恵まれたものと言ふべきです。

「自然は人を造る」を申します。豪溪に親む村人の中から、人材の出なくてはかなはぬものだと思ひます。

次には豪溪遊覽者の落す金も尠少ではないといふことです。

更に受けてゐる利益には交通上です。

この池田村の道には、はしからはしまで自動車が行通してゐますが、もし豪溪がなかつたら自動車が行通せうか。

山間ではありますし、道路もいゝ方ではありません。

それなのに自動車の便を有するといふことは豪溪の恩恵といふべきです。

將來村の發展上にも豪溪の力があります。

さうか豪溪については充分な注意をしてゐて下さい。

衛生によき郷土

傳染病といふものは人によつたり又は動物によつたりして傳染するものですけれど、大へん土地といふものに關係が深いのであります。

古い土水成岩の様な土地であつたならば、しめり氣をもつて水の質が良ろしくありません。それに水ぬきが悪

いものですから、一層病菌がそれに寄生するのです。それはかわつて、花崗岩地は水の質がよく水ぬき亦よくごみとか有機物とか礦物の様なものはりのけ、その上病菌までも流さない様にとめる性質があります。

それですから、此の村には、次に示す様に傳染病にかゝつた者が少いので、傳染病の設備として必ず入用な避病舎は建つてあつても、それに這入る者がないといふ有様です。

避病舎が建つてから三年をへた、僅かに子供が一人入舎したばかりである。

郷土の人

平和な山村、而も四方を取かこんでゐる自然の美しさ、殊に豪溪の奇勝は、自ら郷土の人の心を淨め、加ふるに都會からの刺戟が少いから村民一般にまぜりけのないうふな所があります。

このことは言葉の上にも見出されるのでありまして、「なしてやあ」「いってわけを追及するのや、」どがあしようもない。「そがあなこゝがあるかやあ」「わやー言ふな」などと、直情流露、いかにも林訥な心をはき出してゐるのであります。一般に物の言方がゆつくりし、特有な抑揚をもつてするので、ていねいに聞えます。

大へん勤勉なこゝもいゝこゝです。

敬神の念が厚く、お祭だといへば、みんなお祭氣分になつて、全村その空氣にひたつてしまふ所。まことに言ひ分かぬ氣持に打たれるもので、床しいこゝいふ心さへ湧くのであります。

しかしながら、人間が平和で温順なまゝ、やゝもするまゝ、進取的な心、覇氣といふ様なものが缺け易い、従つて引込思案な人間となる風があるのであります。この点郷土の人の心すべき所ではないでせうか。

共存共榮、以て一村の繁榮をいたすといふ大きい所へ着眼するこゝも大事なことだと思ひます。

集會などには力めて出るやうにしたいと思ひます。

日本人は一般に時間觀念が乏しいと思ひます。平素のつくりしすぎてゐる本村の人も會合の時などは定時を厲行し、他人に迷惑をかけないやうにしようではありませんか。

自分以外に關して割合に無頓着な風がやゝ見えます。豪溪についても「がけが」「がけが」ではあつけない氣がいたします。もつゝ郷土愛に根ざした關心があつて欲しいものだと思ひます。

村はひらけて行く

學校

此の村の學校の歴史を繰つて見ませう。

初め穴栗・見延・豪溪の三つの尋常小學校がありました。

穴栗尋常小學校の前は、かうだつたのです。あそこに戸長をしてゐた平田謙五郎といふ方が、若い者に教育をつけなくてはいけないといふ考で、自宅に身内の若いものをよんで、漢學をさせました。(今の平田靜氏宅の東、倉のある家)生徒數七人。

先生は高梁や岡山から呼んで来て、随分立派な方も居られました。この時はやく腰かけを用ゐ、又黒板もあつたさうです。之を啓蒙所と稱してゐました。

折柄官の方から、學校を建てよとの達しがあつたので、明治七年大砂に學校を建てることになりました。倉を買つてきて校舎に致しました。生徒は普段着のべそくしたものを着て來てゐた由。生徒數三十三人。教師は四人。漢學を習ひました。之を穴栗尋常小學校と申してゐました。

見延尋常小學校は今の中島の土橋のあるところ、中島字高田と申す所にありました。生徒數も穴栗尋常小學校

に同じく、入學年齢も定つてゐませんでした。それに年二回の試験がありまして、之に及第しなかつたものはいつまでも一つの學年に残つてゐなければならなかつたので、同じ學年でありながら、三つも四つも年が異つて面白くないことが多かつたさうです。

ところが、六粟尋常小學校にしても、見延尋常小學校にしても設備が不完全（もちろん硝子窓でなく、障子でした）なので、明治二十二年兩校を合し、明治尋常小學校と改めて、六粟大砂に置きました。生徒は五六十人。豪溪尋常小學校は明治六年の創設でありまして、民家を以て教場に充て、啓蒙所と稱してゐました。がまもな豪谷小學校と改めましたが、常に設備の不完全と教室がどうも狭くなるので、明治九年四月になつて、現在池山神社の北の山すそ、瀧本氏宅の所に、校舎を建て移轉しました。明治二十年には小學校の規則が改正されたので、この學校も廢めることになりました。

次で横谷簡易小學校といふのに變りました。

二十三年又も廢校となり、尋常池田小學校と稱してゐましたけれども、二十六年豪溪尋常小學校と改稱し、四ヶ年程度の尋常科を設け、先生は水子哲一郎氏一人（外に補助教員一人）組合はせ教授をやつたのであります。當時の生徒であつた某氏の話を承りますと數々の珍話があるのであります。

授業のある日です。豪溪尋常小學校と稱した四角な旗を校庭に立てるのさうです。すると生徒がやつて行きます。四年生六人、三年生十五人、二年生二十三人、一年生三十人が當時の生徒數だつた相です。

年齢は随分不揃で、たもこのついた着物をきた生徒もあつた相で、そんな生徒のふうが振つてゐるのです。たもこのはしに緯で小さいくくりをし、背中にボチをつけて置く。体操の時間になるこ、たもを上にはね上げ、ボチで止めて、かけつてゐた相です。動作に便なといふので、學校からもすゝめ、生徒も喜んでゐたと言ふことのでございます。

さて、算術は四年で四則、作文は先生の板書され手紙の文なきを寫す位のこと。讀書といふて今日のやうな讀本（當時簡易讀本なきといふのがありました）をよんでゐました。習字の時には先生が一手をこつて教へ、先生の前で押へられて、ひけていたし、いたしはいへず、随分窮屈だつたさうです。

先生が一人なので差支のある時なき、上級生が算術の問題なき出して教へてゐた相で、従つて上級生の元氣が強く、随分亂暴なこもしてゐたさうです。

冬はストーブもないので圍爐裏をたいてゐた相です。

このやうに明治、豪溪の二小學校は設備もよくないので、明治三十六年四月二つを一緒にし現在の學校の位置に建て、明治四十三年四月高等科を置き、池田尋常高等小學校と改稱しました。生徒の數も増えたので同年十二月、校舎一棟及便所を増築し、十二年四月に一個學級を加へ、さうして今日に及んでゐます。

學校の歴史をしらべて見ても、村の人數の増えることも明に分りますが、更に、目に見えないものゝ、ひらけていくことが感じられるではありませんか。

血のめぐり

七四

「壇もいりこもなくなつたし、それに何ぞれかんぞれ買ふものもあるから」馬の背に横をのせて總社へ出かける。道は山際を通つて、狭くはあるし、凸凹のはけしい坂道です。まんが悪くて崩れさうな所にでもなるこ、馬から小荷駄を下ろし、人の背に負うて行かなくてはならない。上横を朝早く出た人もひる近くでないど町へ着かない。買物をして、歸へつて来る日は暮れる。總社への買物は僅に一日の仕事なる。之は昔のこと。

今は自轉車に乗れる人だつたら、こんな買物位は二、三時間ですますでせう。

今の世は無相通じて生活してゐます。生活する上に必要なものは常に交通路を動いてゐます。人の体も血が血管といふ交通路を通つて養つてゐます。

道はまごこに血管であります。

池田村の道についてあらまししらべて見ませう。

穴栗には昔から、あの太い道がついてゐました。鳥取へ行くのです。

けれども今日のやうに自動車は往來してはゐませんでした。半日も一日もかゝつた道のりも、自動車で走つたなら四五時間もかゝらないでせう。距離は短縮されて來ました。

塚本から山根に沿ひ、平田静氏宅の前を通つて、鏡田の橋へ出るのが昔の本道。橋の東、右に折れて山中を行

く塔坂、宮内(吉備津神社のあるところ)から出てくる人はこれを通つて、穴栗なり見延にやつて來てゐました。

塔坂道を鏡田橋まで出てこず、山の際を通り、今の道路に平行に、三つ木に出て、井風呂谷を横ぎり、すつ

と山際を通つて一本松に出るのが、昔の道だつたらしい。

市場のへんにも幅のせまい舊道が残つて居ります。

上横になつては、中村の原を縦貫する新道は、これこそ最近のこご。野山の妙本寺道まで、今の舊道がその面影を残してゐるが、以前はもつと上の方を通り、古宮のへんはたわをこしてゐたさうであります。

豪溪に、あんなひろい道の通じたのは、あまり昔のことではありません。

されば、馬の背、人の背で荷物を運搬し、その不便を來たら大抵のものではありませんでした。

所が只今の本村を縦に通する横谷道はどうです。荷馬車、中車は勿論のこご、自轉車を飛ばすこごも出來、更に自動車が行するではありませんか。

伯備線が穴栗まで開通したのは大正十三年の二月十七日のことであります。穴栗・豪溪間に自動車を通じたのもその時からです。村はそれ以來の位便利になつたこととせう。穴栗の變り様も急激でした。

交通の完備をはかる計畫は着々となされてゐます。縣道は將來三間幅、町村道は二間幅にする豫定ださうです。更に山組・下根・塚本の道路をば二間幅にすること、及び、福谷村との交通をよくする上から畑ヶ野の道をよくするこごは、話だけでなくて、今や實行に移らんとする機運にありま

七五

道はよくなる。交通機關は益々備つて行く。
血のめぐりはよくなる一方。池田村の健全な成長が待たれます。

耳目はひらく

電燈がついたのは大正十三年八月九日のことでした。それまでは暗いランプの灯でした。汽車もついたりして村の人は新しい世の中でなくてはならない様になり、大正十三年の初頃から電燈の話が持上り、幾度かの相談研究ののち、愈々電氣を引くことになつたのであります。電柱は全部寄附してその上、四千圓もの金まで寄附し、十三年六月から工事が初るや、その勞作は村人だし、人夫賃や寄附金などよせるに、この電燈架設の爲には一萬五六千圓もの費用を投じたのであります。

けれども早速村の人はお蔭を蒙りました。夜がどの位見變つて来たことでせう。更に従来は、ランプで寫すことこの出来る幻燈寫真しか出来ませんでした。たまに大奮發をして活動寫真をやりかけても、ガスが切れたなどこいつておぢやんになり、終を完うしたことはなかつた相です。ところが電氣がついてからは、活動寫真一式、幻燈などはどこにあつたのだらうといふ工合です。

幻燈から活動寫真へ、このことを以て見ても、如何に時勢が、偉大なる力を以て池田村をひつぱつて行つたことか、村のひらけて行く姿が如實に現はれてゐるではありませんか。

まことに村の目がひらけて来たわけでございます。これと同時に電信・電話も通じたので、村の耳もよくなりました。

山の中の一本の電柱には幾すちもの電線が引いてあります。村の景觀に一つの新しみが加へられたやうに思ひます。文明開化の一つの目標を残して行く、村はひらけて行く。村はひらけて行きます。

村の現勢

村の基

一、戸口	三九六
戸数	三九六
人口	三九六
現住人口 (現在村に居る人数)	男 九五三 女 九二二 計 一八七五
本籍人口 (月籍の上にある村の人数)	男 一二四〇 女 一一五三 計 二二九三
一戸平均	現住 四・七三 本籍 六・〇四
大正十一年	現住戸数 男 九六八 女 九五二 計 一九一九
十二年	現住戸数 男 九六九 女 九四四 計 一九一三
十三年	現住戸数 男 九二六 女 九〇七 計 一八三三
大正十一年	本籍人口 男 一、一六八 女 一、一三六 計 二、三〇四
十二年	本籍人口 男 一、一八七 女 一、一四〇 計 二、三二七
十三年	本籍人口 男 一、二〇五 女 一、一四五 計 二、三五〇

試に今大正十一年からの戸数人口の統計を取つて見ますのに

この、現住人口が少数ではあるが、年と共に、減つて居るのに反して、本籍人口が増えてゐるといふことは、何を物語つてゐるのでせうか。

本籍地の池田村に於ては、はかばかしくないので、そこで他郷に天地を求め大に活躍せんとして、出て行く人が多

いからではないでせうか。

副業をおこすことは誠に重要なことと言ふべきです。

現住職業別戸口	戸数	人口
職業		
農業 (農業一式でない極めて貧弱な農業である)	三四四	一六四六
水産	一	二
工業	一四	六五
商業	三五	二五三
公務及自由業	一	四
其他の有業者	一	五
二、土地		
總反別	一九六九二町	

内訳

(一) 民有租地（普通村民の持つてゐる、租税の出る地）

田	畑	宅地	山林	原野
反別	一二三・九	五八・六	一・六	六七五・〇
地價	四三二・二七	一一七四・〇	一五九五一	一五六六

民有免租年期地
（一定年期の間、免租せられる民有地）

(二) 民有地所有区分

1、本村の土地を他町村人が所有する土地

田	畑	山林	宅地
反別	一七・三	四・六	三六・六
地價	一七・三	一五七坪	一五七坪

（民有地を如何に区分して所有されてゐるかの調）

口、本村人が他町村に所有する土地

田	畑	山林	宅地
反別	七・七	一・八	一一〇・〇
地價	七・七	一一〇・〇	一二五八坪

(三) 耕地

田	畑	同
反別	一二三・九	一戸平均
地價	五八・八	三・一

人の営み

一、農業

農業戸数の全戸數に對する割合

生産總額 一三一・二八〇

内訳

米	小麥	麥	其他
七九四・二〇	二二三・六〇	一一二・九八	一七四・〇二
八三・三	一一一・六〇	八〇・〇	一七四・〇二

二、工業 二八六一・四五

酒	二七〇・〇〇〇	三〇〇〇石
醤油	七・五〇〇	二五〇
酢	四・四〇〇	二二〇
麵類	四・二四五	六・〇〇〇

(池田村ミ山林の所参照)

三、副業

- 1、養蠶 九八五九
- 2、林産 二七六七七
- 3、畜産 八三三
- 4、水産 三八〇〇 (以上村現勢の数字は昭和元年末調)

共同の営み

産業組合

毛利元就の矢を以て子を誡めたことは、大變尊いものだと思ひます。
 共存共榮は人の道。互に助け合つて己を利し他人をも利させるこゝろは誠にうるはしいこゝろであります。
 産業組合は、もろ英國のメリヤス職工數名が寄り合つて、金を出し合ひ、商品を安く買つて分け合つたこゝろ

に起るこゝろひます。

組合にはいつてゐる人(これを組合員と言ひます)が金を出し合ひ、纏めて、豆粕を安く買ひ、之を組合員に分配する。出来上つた米は組合の方に任す。組合では世話をする人がちやんと倉庫に保管して置き、米の値が出たと思ふこゝろ之を賣る。その金を組合員にかへす。その間、麥の肥料がある。手もこゝろに金のない人があれば、組合は肥料を貸す。(この肥料は組合員の金を出し合つたもので購入したもの)
 麥が出来て賣つて貰つた中から肥代を出す。

かういつた風のが産業組合のわけあひであります。本村の産業組合は大正元年八月廿一日の創立にかゝり、現在、組合員は四一三人、貯金高は一二一三人の六、九三七圓の巨額に上り、貸付高は三九二人に四六、〇一〇圓致して居ります。(昭和三年七月末調) 組織は、組合長一名、専務理事一名、理事三名、幹事三名を置いてやつてゐます。

本村組合の事業は、一般村民の預金(信用)ミ、購買ミ販賣ミであります。
 この外に養蠶組合なるものがあります。性質は産業組合に異りません。

村農會

農業の改良發達を圖るためには池田村農會が設けられてあります。
 そゝで農會は次のやうな事業をしてゐます。

一、農業の指導獎勵に關すること。

毎年行ふ塩水選や麥種子の消毒等これです。又時々は農會の活動寫眞を寫して極めて有益なことを教へます。又農會の人は實地についても指導します。

二、農業をしてゐる者のためになるやうなこと。

之は農業並に副業方面に必要なものを、安く、しかも有効なものを共同購入するのです。

器具・緑肥・種子・桑苗・柿苗などが買つて貰へることは、村民にまつてごんなに有難いことでせう。

三、此外農會では農業及副業に關することについては、種々研究して居り、本村に適切なる方法を考へて居て呉れます。

會員は五四九。會長一人。副會長一人。評議員八人を置いて會は維持されてゐます。本會の大正十五年度

の事業費は歳入八六四圓。歳出は八三三圓であります。發展的な本會の活動が分るではありませんか。

衛生保健

我郷土がすでに衛生によいことは、述べました。本村現在の衛生保健に關する施設について申し上げます。

お醫者さんが一名。避病舎一。

衛生組合。組長が一名、副組長が一名、その下に組合委員があり、村内の衛生を保つ爲に活動して居られます。

傳染病の豫防、春秋の大清潔法には、官廳を助けて、進んで之に當つてゐます。

小兒保護協會は、村の婦人會の手にかゝり、小兒の保健について力を盡してゐます。

日本全國兒童愛護デーに、虫下しを嘔まして下さるのはこの協會のおかげです。初めて學校へ上る子供に對しては、その前年の春、健康診断をなし、若し病氣のある兒には夫々家庭に於て適當の方法を講じさせる様骨を折られてゐます。

農繁期（田植や稲刈に忙しい時）農家の子供を預らうといふ託兒所の話も可成に進んでゐます。

この外巡回産婆の施設があります。

村の人が衛生保健に關して正しい考を持ち、此の施設と共に、一層理想的な村としなければなりません。

村の自治

一、村の自治

自分のことは人手を藉らずに自分ですることは大事であります。又考の出來た人は他人からこれこれいはれなくても、自分でちやんま正しいことをしていきます。學校にも自治會といふものが出來て、皆さんもその會員なのですからそのへんのことによく御承知でせう。

村はさういふ自治の心の發達した人々によつて、生活してゐます。さうしてこれらの人を一丸とし、たゞはば乗合船の如く、乗手の意のまゝに動いてゐます。さりながら、「船頭多ければ船山に上ぐる」の譬の通り、乗手

の意をくんだ只一人の船頭でなくてはなりません。

村の舵を取つて行く者は村長であります。村の自治機關について述べませう。

二、自治機關

村長。村長を助ける助役一人。税金を取り立てる収入役一人。色々な記録・帳簿を掌る書記一人。これだけが役場の吏員さんです。外に小使さんが一人。

村會は村全体の人の希望や意見を申述べるための機關です。村民がみんなこゝに寄り合つて言ふことも出来るので、その代表者が來ます。これが村會議員（十二名）であります。

村長は村を治めて行く上に、つまり村をよくするために色々な計畫を立てます。その時村の人の考、村の人の様子を聞くために、議員と相談します。これが普通に言ふ村會であります。

此の外小部落には一名づつの組長があります。全部で二十一名。之はほんまうに一から十まで部落のことを世話する役です。

以上のもので村は治められてゐます。治めて行く上に必要な道具なので、それから機關を申します。

さうして村政をなす上には村是さか、村條例、村規約と言ふ規則の上に立つて行はれてゐます。

三、村の財政

さて、村をよくしやう、村全体の人のためになり、みんな幸福に暮らせるやうに考へますと、色々するこゝ

が多いのであります。

道路をよくしやう、橋を架けようとか、或は學校が狭いから建てまゝなくてはならないといった風なのが、それです。

これにはそれ／＼費用がいります。その金はどこから出るか、即ち、村民一般から金を徴するのであります。これが租税であります。

(こゝで一寸言ひます。租税には直接國税と(國の費用に使はれるもの)縣税(縣の費用に使はれるもの)と村税とあります。こゝの税は勿論村税です。

も一つ。事業を多くしたいからとて租税を無茶苦茶にさる、そんなことは出来ないものであります。税をかけようと思つたらば、先づその負擔力をしらべ、それに相應した税しか取り立てられないのです)

村税の徴集額は二三三三四圓で、一戸平均三三三、七七圓なるのであります。

村の貧富によつて、徴税額に多少を來し、村事業の上に直接な影響があるのであります。

此外基本財産があります。

我が池田村を經營して行く上に如何に莫大な費用がかかるか、昭和二・三兩年度の歳入歳出によつて窺ひませう

昭和二年度	歳入	貳萬壹千五百五拾圓
	經常費	壹萬七千參百七拾八圓
	臨時費	四千百七拾貳圓

昭和三年度 歳入 参萬四千八百七拾圓
 經常費 壹萬八千貳百拾四圓
 歳出 臨時費 壹萬六千六百五拾六圓
 昭和二年より三年度が壹萬何千圓も多いといふことは、學校の校舎を増築したり、道路や、橋をなほすのに澤山のお金が入るからです。こんなことは毎年入る金ではない。こんなのを臨時費といふのです。

結 び

人は自然を征服してしまつたから、もうこれ以上財源を見出すことは出来ない。行き詰つたまゝしてゐます。これで満足すべきでせうか、大いに其の方法を考へなければなりません。
 豪溪産業株式會社は此の頃出来ました。かゝる會社の出来たことは、本村發展上將來頼しいことだと思ひます。池田村は實に於て、正に發展的狀態にありと言へるではありませんか。

田 地 と 戸 數

池田村の田地と戸數

現勢調査簿によれば、池田村の戸數は三九六あり、田畑は一八二町七段あります。
 田地は一戸當り幾らになるかといふは、四段六畝一步強となり、一人當り一段弱なるのであります。それでは一段からこの位の收穫があるものか、これを調べるに、米が一石二斗少々、麥が一石八升許りであり

ます。
 人間一人がこれだけで一年を過ぎねばならないのです。人の中には丈夫な大人もあれば、赤坊もあり、年寄りもある。男女の性夫々によつて食べる量も違ひませうが、平均して見ると一人一日三合はいるだらうと思ひます。さうしてごらん下さい。米だけではとても足りはしません。麥をたべてやつこ足りかねるでせう。
 ミころが人間が生活して行く上には、食べる御飯だけでは過ぎません。着物もせねばならず、家の修繕もせねばなりません。頭から爪の先まで、仲々金がいります。さては近所交際費、税金など澤山な費用がいります。ですからこれだけのお米や麥では暮して行ける筈がない。實際本村では農業だけではやつて行けないのです。そこでこの本業（農業）の他に仕事を見つけて、生活費を造り出さなければなりません。これが副業の起るわけ

なのであります。

人口増加と仕事

九〇

一休土地に對して大變に人數の少い時代には、人間は狩をのみして（弓と矢を持って山に行き、鳥獸を捕る、肉は食用、その皮は衣類、住居の一部に。家は簡單な掘立小屋）暮してゐた時代がありました。（狩獵時代）それが進んで農業時代になります。人間の數が稍々増え、集團生活をするやうになつたからであります。田畑に稻・稗・粟の様なものを植ゑ、之を刈り取つて食する。棉を植ゑて綿をなし、絲にとつて布を織り、衣物をなす、こいつた工合でありまして、買ふものまでは埴位のもの。これも物々交換によつたもので、お米を出して埴を貰ふ、といふ風に、萬事農業によつて行けたのです。田畑は人を養ふに足る程の産物を出しました。ところが人間の數が次第々々に増えて行つて、もう農業にのみよることが出来なくなりました。人々は増收の方法を色々工夫しましたけれども、人口増加の足を追ひぬけることは難しい。且つまた、凡ての人間が農業ばかりをしやうたつて、人數が多すぎて、することがない。それがために徒食する人が増えて來ました。

ところがここに機械の發明があり、從來の人力でなして居つたものを機械力にするやうにし、仕事の範圍を廣くしたのであります。汽車や汽船などが出來てから運輸力を進めました。（これは中車で十俵そこ／＼ゴロ／＼運ぶのよりか、汽車、自動車によつた方が、その何十倍も多く、且つ早く運ばれるわけです。）これはひいて物資の供給が、容易敏速になり、（印度の綿が日本へ來だしたことなき）（つまり、世界に広い地域内で有無相通する）ことが容易になつたのであります。生産加工が盛んなる。しかし從來とても生産加工はありました。けれどもこれは家内工業といふもので手内職です。ところが機械によるのですから生産加工は大となつたのであります。（一例をこれば絲つむぎをするに、手取りより紡績機械による方が早く澤山出來る。）

その加工品は大なる運輸力によつて、分配が迅速且つ容易である。ここに於てか機械の發明は産業界の革命を來させ、工業の世界に早變りせしめたのです。さうして都會が發達し、都會集中が盛になつたのであります。さて、ここで、大に刮目して戴かなくてはならぬことがある。それは成程工業の世の中ではあるが、その原料となる物資はどこから出るか、こいふことではありません。これは生産業即ち農業などが供給してゐるのではありませんか。徒に都會へ／＼出て行くことは考へなくてはならぬと思ひます。

二

九一

これは話が外の方へ放れましたが、言つたことをつづめていひますと、人口増加に伴ひ、農業世界より工業の世界へ進轉したとき、それは機械の發明による、と言ふことでもあります。何にしても生活力は膨脹しました。農業によつてこの生活を支へて行かうと言ふのが農村ですから、色々考へることがあります。

なる丈決つた地から多くをこらう。出来ることなら、土地は狭くしても、前の位も取らうといふ風になり、肥料もなる丈少くして取みを多くしようと、工夫したに違ありません。

處が、稻ばつかし、麥や豆ばつかしではやつて行けるものでない。さてどうしたらいいだらう。さ、農業を中心として、副業問題が起るわけです。

さて従來の如く、耕作に手一ぱいかつてゐては先が見えすいてゐる。稻を手でこいでゐるのは機械でし、さうすも動力です、と言つた工合にして、仕事の餘裕をつける。さうしてこの間に養蠶でもしようと言ふ風になるのであります。

で、これから池田村の副業についてしらべて行きたいと思ひます。

池田村の副業

一

副業は土地によつて異なります。氣候なり、土質なり、地勢なり、人なきによつて夫々違ひます。

寒い所では甘蔗の植つけは出来ません。砂地には蘭草も植ゑられません。山間のやうなところは養蠶はい、でせう。商賣に上手な人々は近江なんかのやうに行商に出てもいいでせう。

これだけのことをいつて愈々我が村の副業に移ります。

池田村は谷間の地で兩側が山です。それ故に本村では農業について、この山林からの産物は重要なものです。

(池田村と山林の所参照)

ところが、この山林にて勞働は如何程要するか、つまり山を相手として年百年中仕事があるか、といふにさうはない。伐材は定時であり、薪炭も亦さうである。農業と林野によつて村が維持されるか、といふとそれもない。このことは外國へ出稼に行つてゐる人の多いのでも分ります。

副業の變遷といふやうなことを述べて見ませう。

地誌によると、横谷は煙草の産地であります。古老にきくと、井の原(水子哲一郎氏宅附近)からは良質の煙草が出、池田侯に献上して居つた由。

で、この煙草栽培は相當長く續き、專賣局の指定地でしたが、追々、煙草では引き合はぬといふ聲が起り、大正一二年頃には栽培段別が激減しました。煙草は專賣局に管理されるものであつて、一定の段別以下になるときは

指定地を取消されます。池田村は遂に取消されて、煙草の栽培は跡を絶ちました。

今こゝを書き乍ら現勢調査簿を見ますと、海外渡航者が、大正二年頃から増えかけ、大正五年にぎつと増え、七年八年を最高として、それから下り坂になつてゐます。一般に本村の人口出入の中の出員は、大正二年頃から段々増加し、七・八・九三、九年が最高に上つてゐます。

このことには尚種々の原因もあることせう。大正三年頃には財界の變動があり、七年八年は歐洲大戦後の最も險悪な時でして、米騒動があつたりしました。が何にしても、田は少いし、山もさう頼みにもならず、さりさつて他に副業はないといふ困つた人の多かつたことせう。

さて煙草の栽培の止む頃からボツリ／＼養蠶が初りました。初は試験的にやる位でありましたが、人々も段々注目するやうになり、大正四五年頃からは始める人も見えました、ほんどうに副業としての養蠶は二三年前からの事ですが、現在の状況はさうかと申しまするに、今年あたりの繭の賣高は實に四万圓の巨額に上り、米の産額の七万圓なるに、もつていつて力強い次第です。何と盛なこゝではありませんか。

しかしまだ桑の植付反別が少く、桑を他村に求める人もあるさうで、こんなこゝでは収入も少くあります。將來大に發達すべき副業です。最も考慮すべきものだと思ひます。

二

最近豪溪産業株式會社なるものが出來ました。

これは池田村の産業開發を計畫して起されたものだと思ひます。

豪溪といふ奇勝を有する本村が、この奇勝を探る遊覽者の誘致をよりよくし、(それには1、交通の便をよくすること、2、豪溪の美觀を向上保持する上の設備方法をなすこと、3、宣傳を廣くすること、です。)

こゝに向つて來る旅客に對し、土産として郷土の物産を買はしめる、延いては、これによつて名聲を博したる物産を世に宣傳し、市場を全國的にする、といふことは、實に適切なる意圖であるのであります。松茸、鱒、鮎はこの會社の經營製造にかゝる名産物で、名をきいてもこの村にふさはしい産物である。

見延燒の再興も計畫されつゝあると聞きます。

この新興産業が本村に如何に活氣を與へるこゝか、池田村將來の發展の企てであるこゝに無限の力強さを覺えるのであります。

池田村と山林

山林の現勢

本村の山林は總面積一五七九町九段もあり、田地の面積に對して十倍以上になるのであります。この山林からは種々の産物を出しまして、農産物につぐ重要な財源となつてゐます。産物は次のやうなものです。林野伐採によるもの

用材	五〇〇石	五〇〇〇圓
薪炭材	二・一〇〇棚	一五・七五〇圓
竹材	一〇〇束	二五〇圓
計		二二・〇〇〇圓
林野産物		
芝草	一五・〇〇〇貫	四・五〇〇圓
竹皮	五〇貫	五〇圓
松茸	三・五〇〇斤	一・九二〇圓
菊	八〇貫	三二圓

黒炭 五〇〇貫

計 二〇〇圓

六・七〇二圓 (大正十五年調ニヨル)

之が總計は二七・七〇二圓の巨額に上るのであります。此の内最も重要なものは薪炭材であります。毎朝横谷道を、薪をつんだ馬車の二三駄、中車の四五駄の通らない日ではありません。殆ど年が年中であります。よくもかうまで出ることだ。今さら山林の盡きないものであることがよくお分りになつたでせう。

ところで、山の木を伐つては薪、その他のものにして、出しているますが、何でもかんでも、澤山出して、お金を澤山取らうと無茶苦茶に伐り出すと、大事になるのであります。

山林濫伐は、これより来る弊害を説き、以て山林が人間生活に如何に役立つものであるか以下述べて行きたいと思ひます。

過去の山林

池田小學校住宅の床に幅がかまつてゐます。砂防工事の石碑の拓本です。今その碑文を分り易く書いて見ます。「近時我が岡山縣下の諸川は、少し長雨が降る毎に、大水が出て土手をつぶし、家や田畑を害ふ。考へて見るのに、これは山の伐採をやるのに、定つた時にやらない、無茶苦茶にやるから、山林が禿けてしまふんだ。山林が禿けるからして土砂が崩壊し、川がうづまつてしまふやうになるのだ。そこで岡山縣人の宇野圓三郎氏

がこのことを慨いて、土砂の崩壊をふせぎ止めるのは山林をもつと茂らすより他はないと考へ、明治十五年四月先の縣令(今の縣知事)高崎氏に申上げた。高崎氏はそれはよからうといふので、宇野氏に一切のことをまかせた。そこで、宇野氏は松苗を植ゑて崩れる砂を防がうとし、實に骨を折つたのである。その甲斐があつて工事は大にその効を表した。縣知事の千阪氏も亦大變喜んで、前より一層獎勵した、もうごんな禿山も工事をしない所はなくなつた。

我賀陽郡の見延・穴栗・日羽・横谷・奥坂・西阿曾・久米・黒尾の諸村は山谿の間に跨つてゐますので、さいく此の害をかうむり、村民の困るくと言ふ聲がするばかりなので、始めてこの工事が起りますや、縣の方へお願ひしてやることにした。爾來骨身を惜しまずやつたので土砂の崩れるのは止まつた。

お蔭でもう大水が出たり、堤が切れる様な心配はなくなつた。

かうなつたのは、一体誰のおかげだらうか。宇野氏の功績を表彰せずにをられようか。石碑を立て、後々の人に傳へるわけである。明治二十二年七月上浣 岡山縣屬 多田省一撰。實に濫伐の烈かつたことが、お分りでせう。

山林と人生

然らば何故に木が生えていなくてはいけなにか、山に木が茂つてゐると、さういふよい點があるか、このこと

をしらべて見ませう。

山林は水流を調節すると言ふこと。

樹木は根を張ります。主根から枝根、枝根がさらに、小さくく分れて細根となり、恰度網の目のやうにひろがつてゐます。さうして落葉は重つて綿を敷いた工合です。その他山草なごの雜草、蔓草が生ひ茂る、枝と枝と交へて上をばおほうてしまふ。これが山林のやうすであります。

そこで雨が降りますと、これらの根ごか、落葉雜草ごかはまるで海綿のやうに水を吸ひこる用をなし、一時に雨水を谷川に流しません。さうして地中に入る雨水は、一部は木の根に吸収保持されて、谷川のみなもととなりま

す。是等の關係によりまして、河川は徐々として流れ、幸に急激に土地を削るごごがなく、従つて、水が川に溢れて洪水の行くやうな災難は免れるのであります。

此の他森林は氣候をやわらけますし、又風の障礙ごごになります。(防風林)フランスの西海岸あたりでは、水ご風ごによつて砂をまき上げて、立派な葡萄園を砂丘にしてしまふごごがありました。それを森林を造るごごによつて防ぎ得たのであります。

支那の北部には殆ど樹木がない。洪水は遠慮なしに行く。之がために今では砂漠ごごなつてしまつて、昔はよくひらけて大きな町もあつたのですが、跡方はすつかりありません。しかしもうかうなつては救ふごごは出来ないの

であります。

● 將來の山林

所が今日の如く、森林（山地なれば山林）に對する需要が頗る大であります。伐採と成長とが伴はず、濫伐に近い状態になり易いのであります。

そこで各國が力を盡してゐるのが殖林であります。

獨乙・ス・ス・ロシア・アメリカ等は殖林事業に大に力を致しましたので、今日では澤山の利益をおさめてゐます。

我國はどうか言ひまするに、森林面積は耕地の三倍です。うまくつかつたなら國を富ますことが出来ます。

けれども緒山が所々にあります。

ちやうど我池田村がこの通りではありませんか。

山林は耕地の十倍。山林事業にもつて手を下すことはないでせうか。

薪炭をのみ切り出すことが、そのすべてではない。松脂・樟腦の類をとることも結構ですし、更に化學的作用によつて、種々の藥品、ガスを取るが如きは、いづれも大事なことであります。

よし今出来ないにしても、殖林を大にし、子孫の爲に計つてはさうでせうか。

池田村の歌

塵になやめる都人

春は霞の山櫻

秋は紅葉の錦木や

四時に盡せぬ岩清水

抑我里は其むかし

北は大和に西日美

南に出づれば高梁の

呼べば答へん秦の人

奇巖聳ゆる豪溪は

雲としのける巖頭に

千代の操ミ諸共に

一度は來れ我郷に

夏は縁に包まれて

白銀まがふ冬の雪

むすびて心清めよや

池田侯の領地なり

東は福谷阿曾大井

清き流に足そゞぎ

縣道行けば總社町

其名も高き天柱の

千年をほこる老松の

中國一の奇勝ぞと

語り傳へつきき傳へ

河鹿の聲にききこれて

行く手を迷ひ言こは

山彦ならぬ答をぞ

右は龍頭の瀧壺に

流れ盡せぬ横谷の

見延穴栗の二大字を

農を主なるわざとして

路傍に結ぶくだ物も

こゝに生ひ立つ幼子よ

進んで他郷に出づるこも

偽りかざらぬ真心こ

世のまが事にうちかちて

杖曳く人の絶えまなし

行き暮したる旅人よ

こゝよりとへよ足曳の

なさんと云ひし鶯嶋石

左は八千代男女橋

清き流れを吸みどりて

合せて戸數四百餘戸

探れども盡きぬ炭薪

生を養ふよすががあり

來れや來れ諸共に

祖先の家業をはけむこも

百折不撓の勇氣もて

故郷の光をかざやかせ

大きい郷土

はじめに

皆さんは、今まで小さい郷土について種々勉強して來ました。大きい郷土は尋常四年の讀本卷七の一番始め、「世界」さいふ所で大々習ひました。小さい郷土をならつた皆さんに、是から大きい郷土をお教へしませう。

此の村に生れて此の村に育ち、此の村を知つた皆さんは、さうしても村の人として又日本人として知つてをかねばなりません。皆さんのお家や皆さんの近所で、だん／＼よその國へ働きに行つてゐる人や行つて歸つた人があるでせう。歸つた人にあちらの話を聞いたこゝもありません。あちらのめずらしい物を見せてもらつたこゝもありません。「家」のこゝろでならつた此の村にも、あめりかから歸つた人の家もあるのです。

こゝにかく皆さんは、先生よりたくさんこのこゝを知つてゐるかも知れません。先生は此の村をしらべ、日本の今ごろの有様を知つて、ぜひとも皆さんの心の中にしつかり知つてゐてもらひたいと思ひます。

移民

日本の人口は、昭和二十一年頃には約一億になる、いやそれより以上になるかも知れません。新聞に出てゐた

数字を見ても、一年に百萬の人口が増加してゐる。百萬といへばなんでもない様ですが、假に一人づゝ數へるにすればそれこそ大へんです。

或人は、一圓札を百萬圓數へるのに、一秒間に一枚をすれば、夜晝なく食事もせず、ねることもせず手を休めずに數へて十一日十三時四十六分四十秒かゝるに計算した。さうです、口でこそ百萬圓ですがたいした數ではありませんか。

又、昭和二十一年に一億の人々がきれいなランドミして、一人五十糧の幅があるとするれば、其の長さはさうな長さになるでせう。又、一日一人が八デシリットルたべるとして一日にいくら位のお米をたべますか。それをお金にかへたらいくら位になりますか。それを數へたらいくら位の日時がかかるでせう。

こんな計算をしてゐるに、只目を丸くして驚くばかりですが、一体百萬からふへる人々にお米をつくる土地をあたへるにすればさうすれば良いでせう。

日本を一つの櫻の木にして、みなさんを其の花びらにしたならば、皆さんのさきほころ一番大本である幹を大きくするのは、どんなにしたならばよいでせう。花びらになつてしまふのではありません。花びらになつた氣もちで地に散つてもうもれずに、もつとく國の爲になることを考へようではありませんか。けれども考へるべきが一番大事です。種々な事情によつてやむを得ないこともありません。考へがついて先づ目あてを定め、其の上目あてが何であるか、その目あてに向ふ自分をよくしらなくてはなりません。その自分を知ることが最も大

切なことで、中々自分といふものが分らないものです。充分に自分を知ることが努めなさい。種々な事情もやはり自分を知らうに起るときに起ることです。村に生れ村に育ち、國に生れ國に育つた、皆さんや皆さんの子供が多ぜい持たねばならぬ目あては、必ず移民といふことになるでせう。けれどもそれは誰も彼もといふのではなく心の中に常に世界を考へることはほんごであつても實際移民することは中々さう甘く行きません。大きい郷土は、地理の時間に五年六年高等で習ひますが、こゝでは唯此の村と關係の深い移民と地理についてお話しします。

移民の起るもこ

人といふものは、今の自分の生活よりもよりよい暮らしをしようといふ性質がある。その性質こそ移民の起る一番もこであります。外國には自分の今の生活が上に立つ強い者におさへられるから、おさへられないよりよい生活をするために移民をする者もあります。アメリカなどは、英國におさへられた英國國民が、よりよい暮らしをするためにアメリカに渡つてアメリカ合衆國をたてたのであります。

けれども一番多い移民は、衣・食・住の充分に困つて移民をするもの、又は、仕事の多い賃金の良い所へ移民するものであります。更に自分の同胞が多い所、しかも其の人々が移民して小さい郷土に居た時よりもはるかに幸になつてゐることを傳へ聞いて移民するものも多ぜいあります。移民した人の多い村や縣に

移民の旅費

旅費は、たいてい自分の金でする人は少い。前に移住した友人とか、親類とか同郷人に、金を立替てもらつて移住するのが多く、したがつて移住地がつまらなかつたならば立替が出来ないから渡來者も少くなるのである。人口がこみいつて人口が餘れば、くらしがむづかしくなつて衣・食・住に苦しみ、衣・食・住が充分に得ることの出来る土地に向つて移住する時は、小家族が移住するばかりでなく大きな團體になつて移住することもあります。又ある國になるに自分の國の土地がまだよく開けてゐない爲に、その國は移民を迎へて土地を開いてもらつて國を富ますことに努め、移民にむかつて旅費を出したり、又は、土地をやつたり農具などの種々の適具を出して、自分の國をひらくことに色々な方法をこつてゐます。しかも交通を發達させてみんなに遠い所へでも少しの日數で運賃も安くして移民させることにも努めてゐます。

移民と本國

移民がどんなに本國に利があるかと思はれますと、移民には二つの種類があります。永久的移民と一時的移民があります。日本の移民は一時的移民の方が多いのです。ごちらにしても本國に人口が餘つてゐる場合には、その人口をよいくあいにしたことにもなるし、本國のくらしをたすけることにもなります。又、移民し

た人が本國にある自分の家族に金を送るものも少くありません。これがために本國に金かはいることになつて利益があります。先方では是を見て良い感じはいたしません。此の事が移民排斥といつて移民を許さないものになるのであります。けれども本國では之で大分助かる。イタリヤなどは三百五十万の移民から送つて來る金が三億圓からの大金になつて、輸入の多いイタリヤは大助かりであります。支那が又それ以上いふので、イタリヤはヨーロッパの支那人といはれる様になり、移民國や他の國から排斥せられる様になりました。次に移民する者は大抵若い男女で、これ等を多く出した本國はこまり、移民國ではあまりたくさんな移民者の爲に賃金を安くする。そうなるに移民した若い人たちもこまり、本國と移民者ごちらも苦しむ様なこともあります。ですから人口と移民をも考へなければなりません。

移民と國土

今ごろこそ人口が増加して移民する者が多いが、それまでは海外へ出ることをあまり好まなかつた。その理由は、

- 1 我が國の風土が非常によく、それに地味がよく人口が少かつた。
- 2 昔から農業國で土地とのなれがたい氣持がある。
- 3 徳川幕府の鎖國で海外のことがわからなかつた。

4 外國人と交際を知らぬ。

5 徴兵検査の爲め呼び歸される。

ですからほんごうに我が國のこゝを考へるものは外國の地理は知つておく必要があります。「知識は力なり」
「地理的知識は世界的力なり」をよくあぢはつて地圖を見るこゝに努めなければなりません。

移民の歴史

我が國の移民の歴史をしらべて見ますと、我が國は久しく鎖國してゐたために海外に移民するといふことになつたのはかごろのこと、明治より後であります。その出る人数もほんごに少かつたが、其の移民も歐洲の移民のやうに、移住してそこにいつまでも居るさういふのではなく、一時的のもので、移住した土地でいくらかお金が出来るとすぐに郷土に歸るのであります。

我が國で移民のはけしくふへたのは、明治十年代で十九年に一千三百十五人の移住者があつた。二十年代になつては一層増して、二十七年には一萬を超へる様になつた。そこで其の年に移民に關係する規則が出来ました。これからいよゝ其の數が増して、三十二年には三万一千三百五十四人になりました。その上、それらの人々は、大ていアメリカに移住したのであります。ところが三十四年に日本移民をアメリカが拒つたため一時少くなり、三十五年に一万五千人。此の年に移民保護法が出来まして、働くのをめめて支那や朝鮮以外に渡るものを

取縮りました。

米國に於ても、日本人が多いため、四十二年に國法をもつて移民の取縮りをしようとする排日が盛になり、我が國も移民をさせない様にしたのであります。しかし、南米のブラジルは移民をよろこびますから、そこに移民する様になりました。(排日問題については後に話します)

今日日本人は廣く世界に移民してゐますが、まだ、イタリヤ、支那にくらべるに少く、少くあります。

日本人の移住してゐる處

今ごろの日本移民のすべては六十四万九千九百人餘りで、その内、内地人五十八万一千四百餘人、朝鮮人六万三千七百人、臺灣人四千七百餘人になります。そして關東洲・青島・南洋等を除きますと、日本人の一番多く移住してゐる處は、アジャ州の六十四万餘人、北アメリカ洲の十三万六千人、大洋洲の十一万七千人で、南米の四万三千人、アフリカの七十三人が之につきまゝです。次に移民の表をのせておきます。(括弧の中は内地人でありま

支那	二二、四二九三人	(一五七、三二九人)
北米合衆國	一一五、五五一一人	(一一、五二四人)
ハワイ	一一二、二二一人	(一一、二二一人)

ブラジル	三四、二〇八人	(三四、二〇八人)
カナダ	一七、七二三人	(一七、七二三人)
フィリッピン	一一、一五六人	(一一、〇九九人)
海峽殖民地	一〇、八二八人	(一〇、二〇〇人)
ペル	一〇、二〇〇人	(一〇、二〇〇人)
露領アジヤ	七、〇二八人	(七、〇二六人)
濠洲ト其ノ附近	五、二七四人	(五、二六一人)
蘭領印度	四、四三五人	(四、二二〇人)

さて之を見るに、支那について北米合衆國ですが、之は昔移民した残りで、今ごろは日本人でおもてむき移民としてはぜつたいにゆるされません。

日々の新聞にも出てる通り。排日の法律は大正十二年七月一日から實際に行はれたのであります。

安く働いてその上排斥されるのはさうしてでせうか。此の一番もごを知つて置くことは、日本人として又移民者のたくさんある村人として、皆さんの大切なことであらうと思ひます。

米國の排日問題

米國における我が移民の歴史は、明治より前に米國に居つたものは船乗や漂着した者なご十數人に過ぎなかつたのであります。そして我が移民として入國したのは、明治二年に徳川氏の御雇であつた和蘭人スネールが、カリフォルニア(加州)に於て金礦を探らんとして二回で四十名の日本人の働き人をつれていつたのがそも／＼一番始めであります。其の後二十年の間はほつ／＼ふへて、あまり多數にはなかつたため、支那人の入國をこまわつたアメリカも、排日問題は起さなかつたのであります。

ところがハワイに製糖業が盛んになつて、たくさんの働き人が入用になり、明治十八年に日本移民がハワイに移民し、それから後、ハワイから米國に渡るものがだん／＼増えて明治二十二年よりつゞき其の數が増し、ここに日清戦争が終つてからはつゞき増加しました。三十五年より四十一年の間に一年に一万又は三万から移民し、四十一年には十万三千人になつたのであります。

かやうに移住民がすん／＼太平洋岸に渡つたものですから、加州においてはだん／＼排日が起つて、三十九年には大變やかましくなり一時日米國交にまでひびいて重大問題になつたこともありましたが、此の時日本は移民に規則を定めることにして、やうやく仲が直つたのであります。けれども四十二年以後はすん／＼移住者がへりまして間もなく九方になり、年々行くものよりは歸る者が多くなつてきたのであります。

さて米國において誰が排日を唱へたかと申しますと、サンフランシスコの醫師オードネールといふ人で、之が排日問題の起りでありませう。それがはげしくなつたのは明治三十三年で日本渡米者のはげしく増加した時であ

ります。我が移民数が明治二十三年より前は年々數百であつたのが、三十年より後は年々數千人にましましたから、米國政府が目をつけて移民官を日本に出して日本の移民する人々の土地を巡視したり、太平洋の日本移民のやうすを報告させたのであります。

「米國に於ける日本移民は、移民會社に補助を受けなければ旅行券をも得ることの出来ない低級者で、移民會社は移民勸誘員と旅館と、太平洋における日本旅館と桂庵（口入屋）との聯絡によつて移民を送りつゝある米國移民法の精神は、此の種の移民會社によつて全くふみにじられつゝある。要するに日本移民は少數の實業家青年學生を除く他九割強は苦力階級に屬する低劣なる労働者である。」と。

此の報告こそ米國に於ける同胞移民の運命を定める爲、日本人排斥の眞先にたつたものであります。

「日本人は米國の風俗習慣をこらんとする假の人種だ。」とか。「米國が支那の働き人より受ける危険と日本の働き人より受ける危険とは同一であつて、働き賃が安いことは、米國働き人の恐るべきことである。」といふことで次第に排日運動が盛んになつたのであります。

之から學童問題とか種々な問題があり遂に大正十二年五月二十六日に大統領クローリツチ氏が署名し七月一日から實施された。

批判

排日法案が通過し實施されたことについては我が移民ばかりでなく、日本人全体として大いに反省を要すること

である。排日を實行した米國も無理、道徳をはなれた仕方であるけれども、翻つて日本人自身を省ること必要である。移民者それ自身が世界地理なるものによく精通してゐたか疑問で、その方面によく理解してゐない爲に之が實行をなすことが出来ないであります。故に皆さんは此の方面をよく理解しておく必要がありませう。次に當時の新聞の記事をのせておきます。

押し潰されたる正義（東京朝日新聞）

今や米國議會の排日立法は、世界各國の大問題となつた。移民問題に關係のあるないを問はず、いづれもいひ合はしたやうに米國議會の不法を非難し、日本の立場に深甚なる同情をよせてゐる。殊に健全なる一般米國市民は、祖國の名譽が排日議員等の無理解なる排他的行爲によつて傷つけられたのを憤り、これに猛烈なる攻撃を加へてゐる。曾て世界は正義人道の名によつてドイツの潛航艇を攻撃したが、平時の場合にあたり今回の如く世界の輿論が期せずして奮起したことはない。正義を愛し平和を念むる各國民の熱情は、凝つて日本國民に對する同情となり米國議會に對する反感となつたのである。純なる米國市民をにくむのではなく、無法なる排日議員をにくむの餘り、世界をして米國に果して自由平等あるや否やを疑はしむる様になつたのだ。これを見ても排日移民立法は、單純なる利權問題ではなく正義人道の根本問題であることがわかる。各國が日本に同情するのはそれが爲に人類社會の根本法則たる正義人道が根柢からくつがへされるからだ。特に米國を憎み特に日本を愛する譯ではない。

いふまでもなく正義は最後の勝利だ。よしそれが一時誤れる感情や脅威によつてその非をさけても、世界はいつまでもその非をさげさすものではない。必ずや早晚何等かの機会に於いて酬いられるものと見なければならぬ。論より證據、現に米國は正義人道を何ごも思はぬ排日議會を有するために世界的非難の焦点となり、國際的に無援孤立の状態に陥りつゝあるではないか。一片の感情のために國家の大事を誤り國際協調をみだすものなどいはれても、想らく辯解の辭がないだらう。有應にいへばわれ等は少し米國議會を買ひかぶつてゐたやうだ。殊に上院議員に於てそうだ。今や下院もまたその上院にも、曾て米國市民のほこりとした自由平等もなく正義人道もないこゝが明白になつた。米人中でも心あるものはこの現狀に愛憎をつかし、その將來を憂ふのも無理はない。排日移民立法は、もし米國議會が犯した罪であるとしたらその最大なものがある。我等は考へるが、かれ等排日議員は何ごも思つてゐないらしい。この心こそやがて政治的にも亦精神的にも米國を殺すものではあるまいか。われらは實に米國のためにこれを惜しむ。

たゞわれ等は、米國市民の間に今なほ正義人道を有する人々のあることを心強く感ずるのである。(後畧)

有望なる南米

我が國は米國の様に移住國のすべてから排斥を受けるかといふことはありません。南米ブラジルなどは移民をよるこんでむかへてくれるのであります。滿蒙も近い内に有望なるでせう。

ブラジルの富源の豊かであることは申すまでもありませんが、其國土は我が國の十三倍で五十五万餘方里であるのに、人口は三千六十五万人、一方里の密度が六十五人にすぎません。ですからブラジル政府は海外から移民してもらつて移民の力によつてブラジルを拓き、ブラジルの富を増し世の中を進歩させる考へであります。日本移民は三万四千餘人で、其の中商業、漁業をしてゐるものが少く、ほとんど農業をやつてゐるのであります。農業をしてゐるものは多く珈琲園の除草、珈琲摘採、乾燥、運搬の働きで、中にはまじめで我が同胞の名譽をあげてゐる人もあれば中には不心得より約束を守らず我が國人が排斥される原因をつくる人もあると聞きますが、大体此の地は現在將來における我が移民の發展上又は對外投資上有望と思はれます。土地代なども場所によつてちがひますが、一アルケール(二町五段)六十又八百ミル(一ミルは五十錢)と見れば大きい違ひはありません。それですから相當な先輩があつて、渡航費の外五六百圓もあり千圓もあれば農民となり相當な利益が得られます。ブラジルに移民を送るを業とする會社に海外興業會社があります。此の會社は移民に金を貸しておくからその取立のため社員を彼の地に派遣しておきます。又ブラジル政府と交渉する爲にブラジル移民組合をこしらへて其の支部をサンパウロ州においてをります。

珈琲園に働く日本人の仕事に働き賃は約次の通りであります。

カルタミ稱する除草

一ヶ年間四回又は六回を要し、一千本に對し百二十ミル又は二百ミル、一人の受持数は一千本から三千本位、

平均二千本で一家族六千本を普通とし七百八十ミルを得られる。

コレタ・デ・カフエー（珈琲の收穫）

一俵（一ミル二百）よくなれたものは一家族四百俵を得ますから四百八十ミル。

日 役

十五才以上のものを一人前とし一家族三名一日九ミルで平均一ケ年五十あるから四百五十ミル。

間 作

米五十俵 七百五十ミル 豆二十五俵 二百五十ミル 玉蜀黍 牛車三台百八十ミル 豚五匹 一百ミル。

一ケ年合計三千二百九十ミル、三人家族一ケ月の生活費百ミル、一ケ年二百ミル、差引二千ミル、日本金の一千圓を残すことになります。けれども之は計算にすぎません病氣になつたり、よくなれてゐないミ珈琲四百俵の四分の一位しかこれない家族もあります。

珈琲の實は櫻桃大で杖にひつついてなつてゐて始め青く中頃赤く、うれたならば黒くなります。それを手で抜き株の根もとに落ちたのを熊手でかき集めふりて袋に入れてるのであります。例の灰の様な赤土がよく乾てゐるので首でも耳でもほこりで一ぱいです。着物まで暗紅色にそまつてゐます。

汗が流れてほこりが着いて日本人だがブラジル人だがわからなくなりました。大い素足で男女老若皆一生懸命でやつてゐるのです。一日に三人家族で十袋拾へます。一袋一ミル二百だといひますから一家族で一日に六圓にな

ります。

十四、五才の日本の子供が二人きりでやつてゐます。お父さんが病氣だといふのです、なんもなく涙が出るやうです。

此の地に六年居るこいふもの、三年になるこいふもの、間作で米を百十俵こつたこいふもの、豚を十五、六持つてゐるこいふもの、種々様々です。天涯萬里の地で世界の人々の間で奮闘してゐる人々、なんこいつても感心せずには居れませぬ。

ブラジル國が、日本人將來の發展地として有望なること、又移民としては「一攫千金」「濡れ手に粟。」「ミかの成金病の空想をなさず、まじめにたしかに奮闘しなければなりません。

南米のブラジル、アルゼンチン、チリ等は氣候が日本さちがはなない國ですから、日本人にあつらへ向きで土地はたゞと同じ様に安くくれることは、土地やブラジル國なご國々が手をうけて日本人の來るのを待つてゐるといふ有様です。南米の拓けて居ない土地を拓いて南米を富まし世界を富まし人々問題に苦しむ故國を救ふことは只移民するかせぬかにある。

アルゼンチン大統領アルビーシといふ人が「日本人が來たら米を作つてもらふのだ。」と希望して待つて居ます。地味に米に適し米作に上手な日本人が移住して米を作つたならば、十年ならずして日本に米を輸出することが出来るであります。「久しぶりで一寸歸國しますが、ノンビリした南米の生活をしたら日本内地はお話しにならぬ。」は南米移住民の話してあります。

世界各國の人々によつて作られた寄合世帯アルゼンチンに居ると何かそんな気がする。住心地のよい自由なブエノスアイレスの街で、ある日はゆう／＼ラプラタ河に船を浮かべ、ある日はパレルモの大公園を散策してゐると母國に居る様な心安さを感じる。そこに小うるさい人種問題なきを超越して黄色人種であらうが日本人であらうが、何ものをも抱擁するこの國の大きさがあつた。

いふまでもなく、この國九百万の國民の大部分はスペイン系の人間であるにしても、百万を超すイタリヤ人も居ればドイツ人、フランス人、トルコ人、ロシア人の數、いづれも何十万を數へるであらう。イタリヤ語の新聞、英語の新聞、フランス語の新聞が堂々たる勢力を持つてゐるのも世界的植民地といふ氣分を強める。お國の言葉で公開演説會を開かうが、宣傳ビラをまかうが、政府も無關心なら一般もあたりまへだと思つてゐる。最も憲法第何條かに「アルゼンチンは歐洲移民を觀迎すること」の一條が嚴然と光つてゐるところ移民の收容は此の國の方針である、移民によつて作られた國、そして移民によつて築いた國である。

この寄合世帯の中に日本人が三千人ゐる。餘り海外に發展地を持たぬ日本から見れば一國に三千人の勢力は大したものにも見えようが、此の國の大きさ各國民との比較から見れば問題にならぬ微少さだ。尤もこれ等の日本人は直接此の國へ移民として來たものは殆どなく、多くはこの地の有望な事を聞いてペルーやブラジルから逃亡

して來たのである。

彼等は先づいひ合はしたやうに農耕地へ志した。しかしこの農業が日本と全然違つてゐるばかりでなく、裸一貫で何の手づるもなく飛び出して來たのでは取りつく島もない。彼等はかうして都會へ集つた。現在では良い日本人會もあれば小さいにしても日本飯屋も下宿屋も立つて行くほどブエノスの街に日本人が集つてゐる。

成功者といつて目星しいものは居ないが、資本二三萬圓位のカフェエ店、雜貨店、花屋なきがある。小成金は三百人位で其の他は働き人仲間の街にうづまる下級働き人だ。

この中にあつて見逃し難いのは、農業方面に獨歩の地盤を築いてゐる伊藤農學博士の努力である。博士は盛岡高等農林學校の校長をすて、一個の移民として十五年前に渡つた人である。以來幾度も失敗を重ねながら今日ではエスベランサに五千町歩の土地と七千頭の牛羊を持ち、幾百の歐洲人及び日本人を使役し、この國の大地主と對峙して恥しくない地位を持つてゐる。

博士は「アルゼンチンの農業は大資本を以つてやらねば望みはない。もし日本が資本を是に出して日本人を使つてやれば必ず成功するであらう。」と。博士の言の様に資本と相當の準備をもつて臨んだならば、此の國の農業は決して日本人に不向ではない。氣候がよい土地が肥へてゐる、その上入國は自由。農業にも商業にも此の國は日本向であつて、然も現在移民といふことを忘れられてゐる。

今の中に移民を送ることをせず、やがて此の國に人口が充滿してからやれ移民だといへば憲法に「アジア移民

を排斥す。』とやられるかも知れぬ。

重ねていふ、アルゼンチンは日本人の發展地として有望である。

アルゼンチンの生命は田舎にあり！ 前大統領イリユーセン氏がその教書に發表したやうに、アルゼンチンは農牧の國である。スペイン人フアンデスソリスに發見されてから僅か四百年、建國の歴史は餘りに短い。この年月に今日の文明と國富を築き上げたのも、「南米の北米」として將來恐るべきものも實にその後、廣大測り知れぬ農牧の大富源を控へてゐるこゝである。アンデス山脈のメンドサ驛から汽車で二十五時間、私は大平原を横ぎつてこの國の生命であるカンボを見た。ほうくとして幾千哩、平坦といつてこれ程平坦がどこにあらう。目の届く限り山はおろか一尺の高さの岡さへもない。さこまで行つても無限に展開した草原で、草原の未は遂に天につらなつてゐるのだ。それが荒けすりの原始そのまゝの姿で、丈なす草原が思ひのまゝにはびこつてゐる。人工が加へてゐるのは僅に農場と農場を境する針金の柵だけである。家が見える、牧者の家である、二十哩四方位のところ三軒四軒あるばかりで、その外は青い草原をうづめる幾千幾万の牛と羊と馬の群である。しかも車窓から見たこの廣い自然は、極僅に大地主の手にあるのだといふ。一つの農場でもその廣いものは八十哩から百哩に及び馬に乗つても二日も三日も同じ方向に進まねば境界に達しないのである。最も裕福な彼等農場主から言へば、この廣い土地を小刻みにして耕作する必要もなく、又人の少いこの國で農夫を集めることも出来ない。市街の附近には所々に耕作地が見える。それでも猫の額ほどの土地を一つ一つ蹶の先で掘返してゐる、日本の農

業は違ふ收穫も除草も種まきも一緒にやる大規模の器械が幾臺か廣い地の中を動いてゐる。仕事があくまで大ざつぱだ。かうしてもなほ手の届かぬ自然が限りなく残されてゐる。日本内地の七倍ほさある國土の八割は豊かな沃野である。

しかも人口は九百万たらず、一方里の密度は四十七人といふまばらだ。日本の二千二百四十人にくらべるに實に五十分の一にしか當らぬ。

最近の發表では、牛の数は二千八百万頭、羊が四千六百万頭に達し、冷凍肉として一ヶ年輸出される牛は百五十万頭、羊が二百五十万頭に達してゐる。羊毛や牛皮や食糧品の輸出が年々殖えてゆくのも農業國としてのこの國の誇りである。

以上大畧移民について話しましたが、まだく皆さんの知らない良い國があります。人口に困り、その日の生活に困る日本人は、今少し 廣い世界に活動しなければなりません。四海比隣、山の奥の一軒屋のメリケン粉の如しである。即ち我が移民は自らの爲日本のため人の爲め世界のため、拓げざる所を拓き苦しむ者に餘裕を作るために日本移民は「我が日本の代表者として確なる考へを以て移民する」ここにあります。

「郷土の榮終り」

昭和三年十一月十日印刷
昭和三年十一月十五日發行

(非賣品)

發行所 岡山縣吉備郡池田町 池田尋常高等小學校地理研究會

編輯人 白神信太郎

印刷人 柳本弘士智

印刷所 柳本印刷所

319
45

